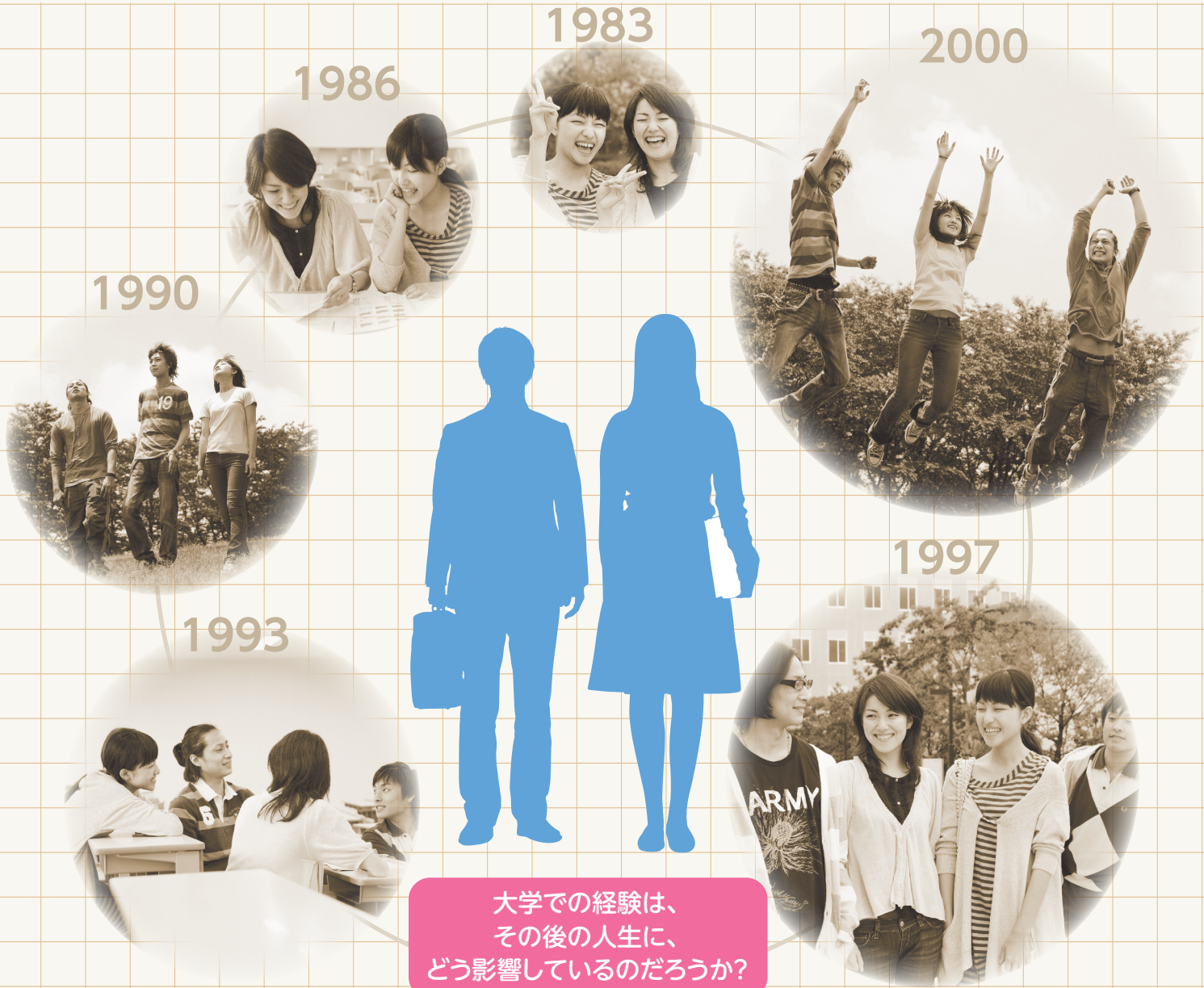


大学での学びと成長に関する ふりかえり調査



本調査は、全国の短期大学卒業以上の学歴を持つ
約20,000名の方を対象に実施しました。
この調査を通して、明らかにしたのは次の2点です。

- 1 大学教育改革によって、どのような変化がもたらされたか。
- 2 大学での学びは、学習成果さらには卒業後の自己効力感とどう関連するのか。

この速報版では、調査結果の中から特に注目したいデータを抜粋してご紹介します。

企画背景

大学教育改革は、この二十数年の間、大学教育のユニバーサル化、市場化、グローバル化といった世界的潮流と、少子化、長引く景気の低迷、規制緩和といった日本独自の要因を背景に、さまざまな制度・組織改編を進めてきた(下の年表参照)。これらの改革によって、大学教育を受けた学生にどのような変化がもたらされたのだろうか。また、大学教育の変化は、学生の学びと成長に、どのように貢献できているのだろうか。本調査は以上の問題意識を背景に実施した。

大学教育改革の流れ

(西暦)	主な制度改革	政府答申・報告など	教育改善の主な動き
1991	・大学設置基準の大綱化 ・自己点検・評価努力義務化	・大学教育の改善について(大学審議会)	
1992			
1993			
1994			
1995			
1996			
1997		・高等教育の一層の改善について(大学審議会)	
1998		・21世紀の大学像と今後の改革方針について(大学審議会)	
1999			
2000			
2001	・自己点検・評価の実施、公表の義務化	・大学(国立大学)の構造改革の方針(経済財政諮問会議への報告)	
2002		・大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について(中央教育審議会)	
2003	・「学部」「学科」設置認可の準則化 ・届け出制実施		
2004	・国立大学法人化 ・認証評価受審義務化		
2005		・我が国の高等教育の将来像(中央教育審議会)	
2006			
2007			
2008	・大学設置基準などの改正によるFD義務化	・学士課程教育の構築に向けて(中央教育審議会)	
2009	・大学情報の公表およびキャリア教育の制度化		
2010			
2011			
2012	・大学改革実行プランの公表 ・新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(中央教育審議会)		
2013		・教育再生実行会議第三次提言「これからの大学教育の在り方について」 ・教育再生実行会議第四次提言「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」 ・国立大学改革プランの公表	
2014	・学校教育法の改正により、教授会の学長諮問機関化。国立大学法人法の改正により、学長選考基準、結果公表の義務付け	・「大学ガバナンス改革の推進について(審議まとめ)」(中央教育審議会)	

● FDの拡大・普及

実施率 52% (2000年)
↓
97% (2008年)

● 初年次教育の実施

実施率 71% (2006年)
↓
94% (2012年)

● キャリア教育の実施

実施率 93% (2008年)
↓
98% (2012年)

● GPによる教育改革の普及

- ・特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)
- ・現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)
- ・質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)
- ・大学生の就業力育成支援事業
- ・大学教育再生加速プログラム(AP)

<授業の状況> ※4
・ディスカッションの機会を取り入れた授業が「よく+ある程度あった」と回答した学生 47% (2008年)
→ 54% (2012年)

・グループワークなどの協同作業をする授業が「よく+ある程度あった」と回答した学生 53% (2008年)
→ 59% (2012年)

<初年次教育への取り組み状況>
・レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム 70% (2008年)
→ 82% (2012年)

・大学内の教育資源(図書館を含む)の活用方法を身に付けるためのプログラム 27% (2008年)
→ 61% (2012年)

<キャリア教育への取り組み状況>
・コミュニケーション能力、課題発見・解決能力、論理的思考力等の能力の育成を目的とした授業科目の開設 61% (2009年)
→ 76% (2012年)

・資格取得・就職対策等を目的とした授業科目の開設 52% (2009年)
→ 68% (2012年)

※1 FDとは、ファカルティ・ディベロップメント(大学の教育の内容及び方法の改善を図るための教員の組織的な研修等)の略。
 ※2 初年次教育とは、高等学校から大学への円滑な移行を図るため、主に大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。
 ※3 GPとは、「Good Practice」をキーワードとして、大学における学生教育の質の向上を目指す優れた実践を選び、文部科学省がサポートする取組み。
 ※4 「大学生の学習・生活実態調査」(ベネッセ教育総合研究所)より引用。
 ※5 ※4以外のデータは、「大学における教育内容・方法の改善等の実施状況についての調査結果」(文部科学省)より引用。

目次

調査概要…………… 3

基本属性…………… 4～5

【第I部】大学教育改革の効果は？
 = 23～34歳と40～55歳の世代間比較による大学教育の変化 =
 調査結果より明らかになったこと…………… 6

① 大学入学前の学習…………… 7

② 大学選択…………… 8

③ 大学入学直後…………… 9

④ 大学での学習…………… 10

⑤ 大学での学びの環境…………… 11

⑥ 大学教育の印象…………… 12

⑦ 大学教育を通じた学びの機会…………… 13

⑧ 大学での学習成果…………… 14

⑨ 大学での学びの充実と成長実感…………… 15

⑩ 大学教育観…………… 16

⑪ 卒業大学への思い・現在の自己効力感…………… 17

【第II部】大学教育と学習成果、さらに卒業後の自己効力感への関連…………… 18

① どのような学びの機会が能力の獲得につながっているか？…………… 19～20

② 大学教育は現在の自己効力感につながっているか？…………… 21

③ 大学教育の機会を豊かにする学び手の要件とはなにか？…………… 22～23

調査設計

大学卒業後の視点から、自分の経験した大学教育を振り返ることで、「大学時代の学びの機会」が「学習成果」や卒業後の「自己効力感」にどう関連しているかを明らかにした。

さらに、調査の対象を、

- 大学教育改革が本格化する前の1990年前半までに、大学に入学した層⇒(調査時) 40～55歳
- 大学教育改革が本格化した2000年以降に、大学に入学した層⇒(調査時) 23～34歳の2つの年齢層に分けた。この2つの世代間で比較することにより、大学改革によって、どのような変化をもたらされたかを明らかにした。

※本調査の実施前後に、大学教育の実態を把握し調査設計・分析をより精緻化する目的で「大学での学びと成長に関するヒアリング調査」を行った。ヒアリング調査は、4年制大学卒業以上の学歴を持つ有職者の中から、文系・理系、性別がそれぞれ1：1になるようサンプリングした計32名を対象とした。2014年12月、2015年1月、8月に実施した。

調査テーマ 大学時代の学びや成長についての意識と実態

調査方法 インターネット調査

調査時期 ①2015年3月12日～13日
②2015年5月1日～8日

対象と抽出方法

23～34歳、40～55歳の日本の短期大学、4年制大学、6年制大学卒業の学歴を持つ者。

インターネット調査会社のモニター母集団約588万人の中から、上記属性に該当する者のうち、調査時期①では最終学歴が、短期大学、4年制大学卒業の者に、②では6年制大学卒業、大学院修了以上の者に調査協力を依頼。また回答者の居住地が、首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)・近畿圏(大阪府、京都府、奈良県、兵庫県、和歌山県)とその他地域が1：1となるサンプル構成を目指して回収を行った。

有効回答数 19,833名
23～34歳：11,613名
40～55歳：8,220名

調査項目

【学生時代のふりかえり】

高校での学習／大学入学理由／進学した大学の入試方式／大学入学時の満足度／大学入学時の行動タイプ／大学入学時の状況／教職員とのつながり／大学での学習／大学の設備・制度の利用／大学時代の経験／大学教育に対する印象／大学教育を通じた学びの機会／大学での学習成果／学びの充実度／成長実感 など

【現在の考えや状況】

職業／就労経験／キャリア観／大学教育に対する考え／卒業大学への思い／キャリアの成熟度／現在の自己効力感など

●ウェイトバック集計について

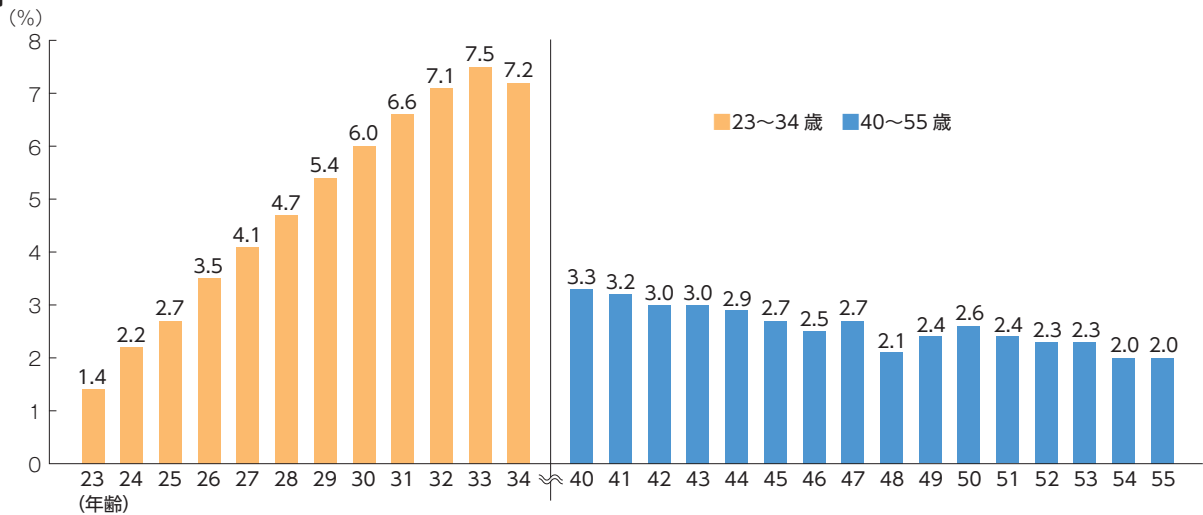
回収した調査データは、母集団の実際の構成比(性別)に合わせてデータに重み付けして集計を行った。ウェイト作成にあたっては、調査対象者が満18歳時点での全国の大学入学者数(文部科学省発表)より性別比を算出したものを利用した。

●本調査結果を読む際の留意点

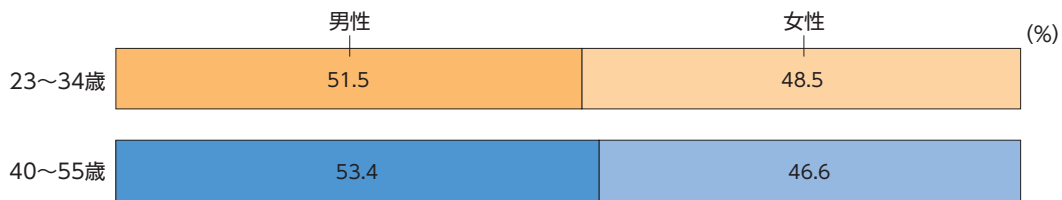
- ・本調査結果で使用している百分比(%)は、小数点第2位以下を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。
- ・特別な注記がない限り、本調査結果の分析に用いた数値は、有効回答数23～34歳11,613名、40～55歳8,220名を母数として算出している。
- ・各図表内の()はサンプル数を表す。
- ・複数大学を卒業した回答者には、一番最後に卒業した日本の大学について回答を依頼した。
- ・設問の「大学」とは、回答者が卒業した大学を指す前提で、回答を依頼した。

基本属性

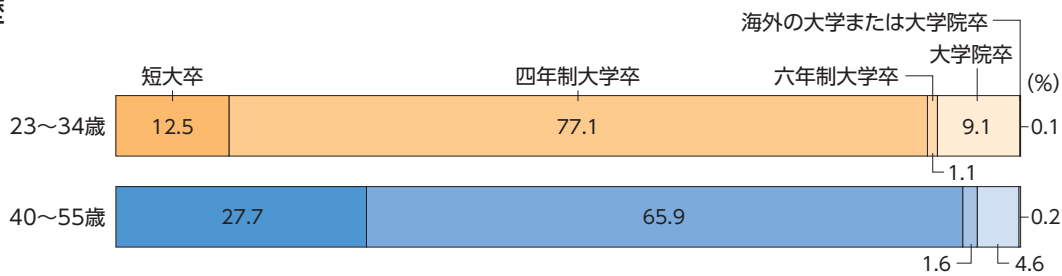
●年齢



●性別

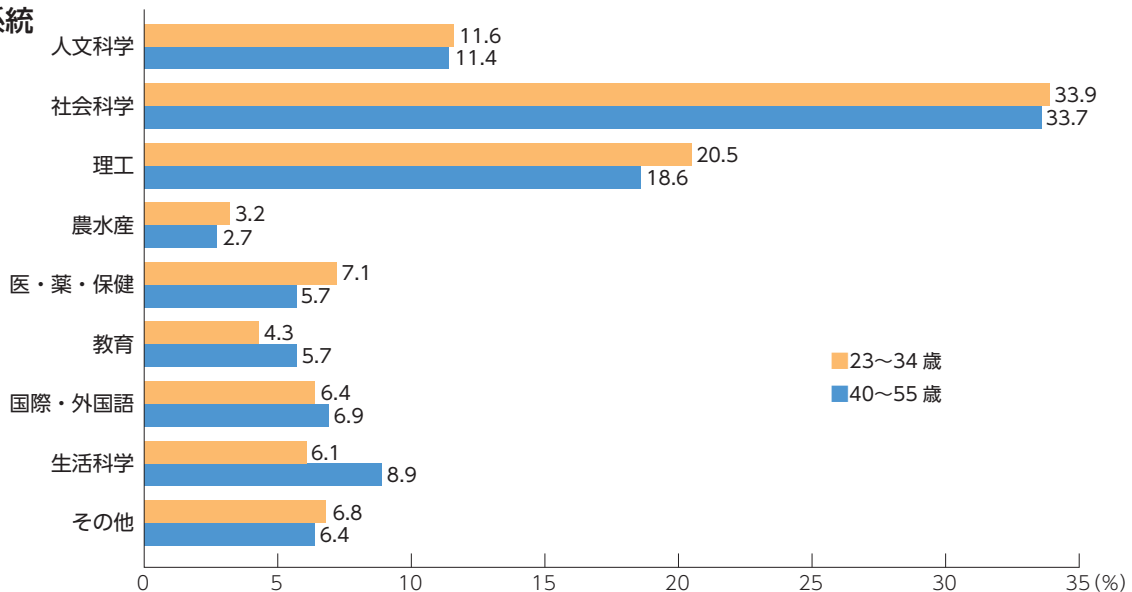


●最終学歴



※ 卒業・終了した大学をすべて選択する設問(複数回答)より、最終学歴を作成。選択した回答の最大値が、「日本の短期大学」を短大卒、「日本の4年制大学」を四年制大学卒、「日本の6年制大学」を六年制大学卒、「日本の大学院修士課程」「日本の大学院博士課程」「日本の専門職大学院」を大学院卒、「海外の大学または大学院」を海外の大学または大学院卒とした。

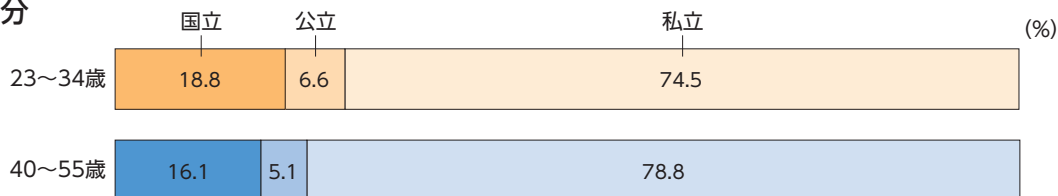
●学部系統



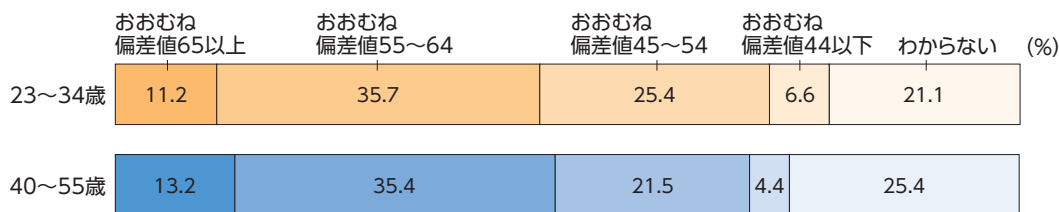
※ 「人文系統(文学、心理学、文化学など)」を人文科学、「社会学系統(社会学部、社会福祉学部など)」、「法学系統(法学、政治学、政治経済学など)」、「経済学系統(経済、経営、商学部、流通学など)」を社会科学、「理学系統(理学部、生命科学、地球環境など)」、「工学系統(理工学部、システム工、情報工など)」を理工、「農学・水産学系統(農、水産、生物資源、獣医、酪農など)」を農水産、「保健衛生系統(保健、保健医療、看護、看護医療など)」、「医学(医学部)」、「歯学(歯学部)」、「薬学系統(薬学部など)」を医・薬・保健、「教育学系統(学校教育学など)」を教育、「外国語学系統(外国語学部など)」、「国際学系統(国際関係学、国際情報など)」を国際・外国語、「生活科学系統(家政、食物栄養、人間発達、保育など)」を生活科学、「芸術系統(造形、音楽など)」、「総合科学(総合)系統(総合科学、教養、環境情報など)」、「その他」をその他とする。

基本属性

● 大学設置区分

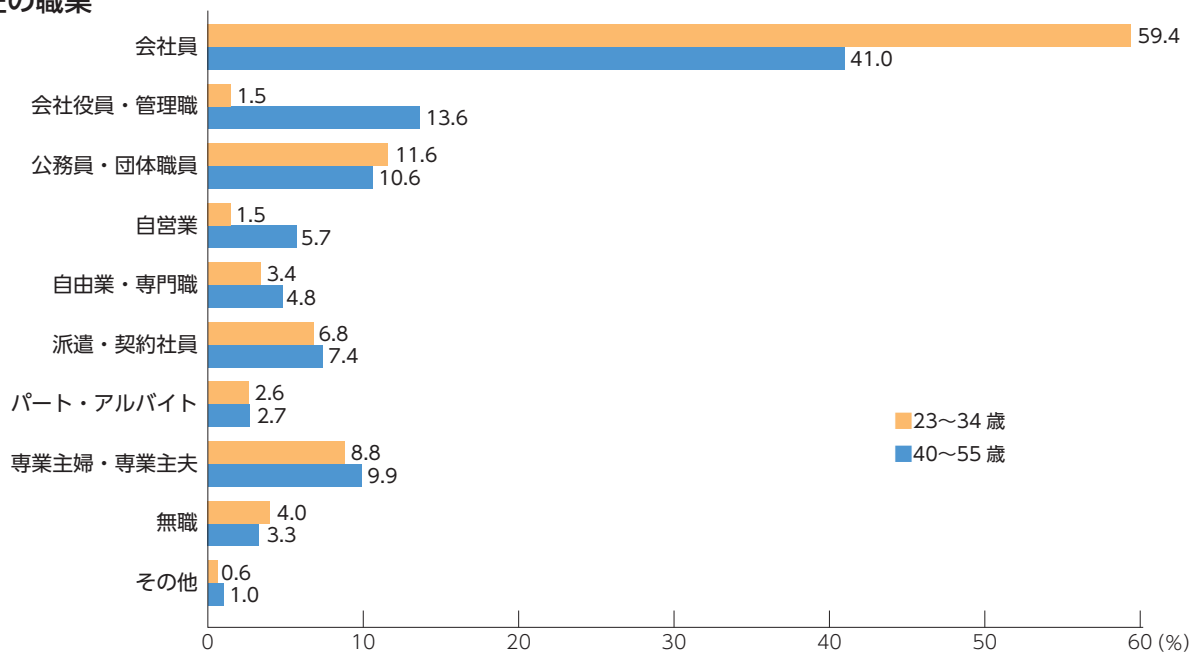


● 偏差値(回答者による)

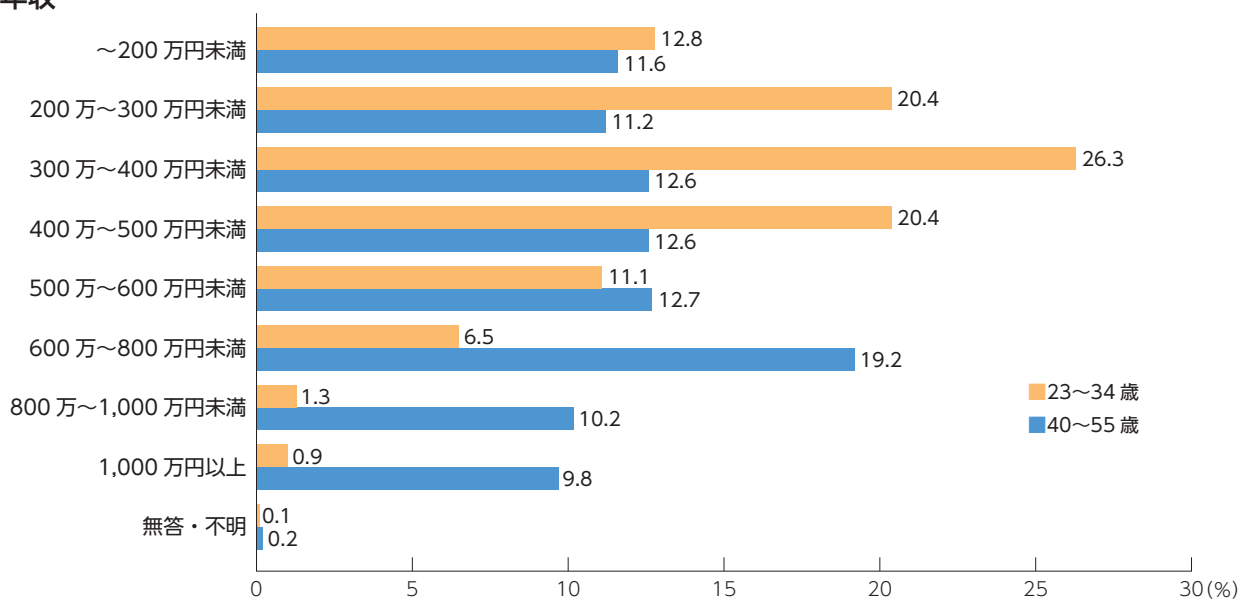


※設問「あなたをご卒業された大学の入試難易度にあてはまるものをひとつお選びください。」の回答結果である。

● 現在の職業



● 年収



※現在有職者のみ回答。対象は、17,252名。

※「0円」、「1円～103万円以下」、「103万円より多い～130万円未満」、「130万～200万円未満」を～200万円未満、「1,000万～1,200万円未満」、「1,200万～1,500万円未満」、「1,500万円以上」を1000万円以上に合算する。「200万～300万円未満」、「300万～400万円未満」、「400万～500万円未満」、「500万～600万円未満」、「600万～800万円未満」、「800万～1,000万円未満」はそのままである。



●調査結果より明らかになったこと

【大学の変化】

23～34歳と40～55歳の世代別に調査結果を比較すると、大学の教員・職員の学生支援は手厚くなり、学生の設備、制度の利用度も向上しており、ソフト、ハードともに**学びの環境整備が進められている**。また、**内容・形式ともに多様な教育プログラムの提供機会が増加**しており、教育面でも大学の変化が明らかとなった。これらの変化は、大学教育関係者が学生の成長のために尽力してきた結果であり、1990年代以降の大学教育改革の成果といえる。

【学生の変化】

23～34歳と40～55歳の世代別に調査結果を比較すると、目的意識を持った大学進学により、**学習意欲を持って入学する学生が増加し、大学での学習態度が真面目になっている**。一方で、大学に対する期待の高まりの反動だろうか、入学後の生活や大学での学習への戸惑いを感じる学生の割合は増え、大学不適應の問題は深刻化している。

また、卒業生が社会経験を積むほどに、主体的学びの価値を痛感している一方で、在學生はその価値に気付かずにいることもわかった。学生のうちに、大学での学びの価値を知り、恵まれた学びの環境から最大限の学習成果を得ようとする姿勢を持たせることが重要である。

●参考 大学進学率の推移(1980～2010年)

年(西暦)	4年制大学・短期大学への進学率
1980	37.4%
1985	37.6%
1990	36.3%
1995	45.2%
2000	49.1%
2005	51.5%
2010	56.8%

本調査対象者の大学入学年に該当する期間の大学進学率の推移。30年間で37.4%から56.8%まで増加し、大学のユニバーサル化が進んだ。

※出典 文部科学省「学校基本調査」より



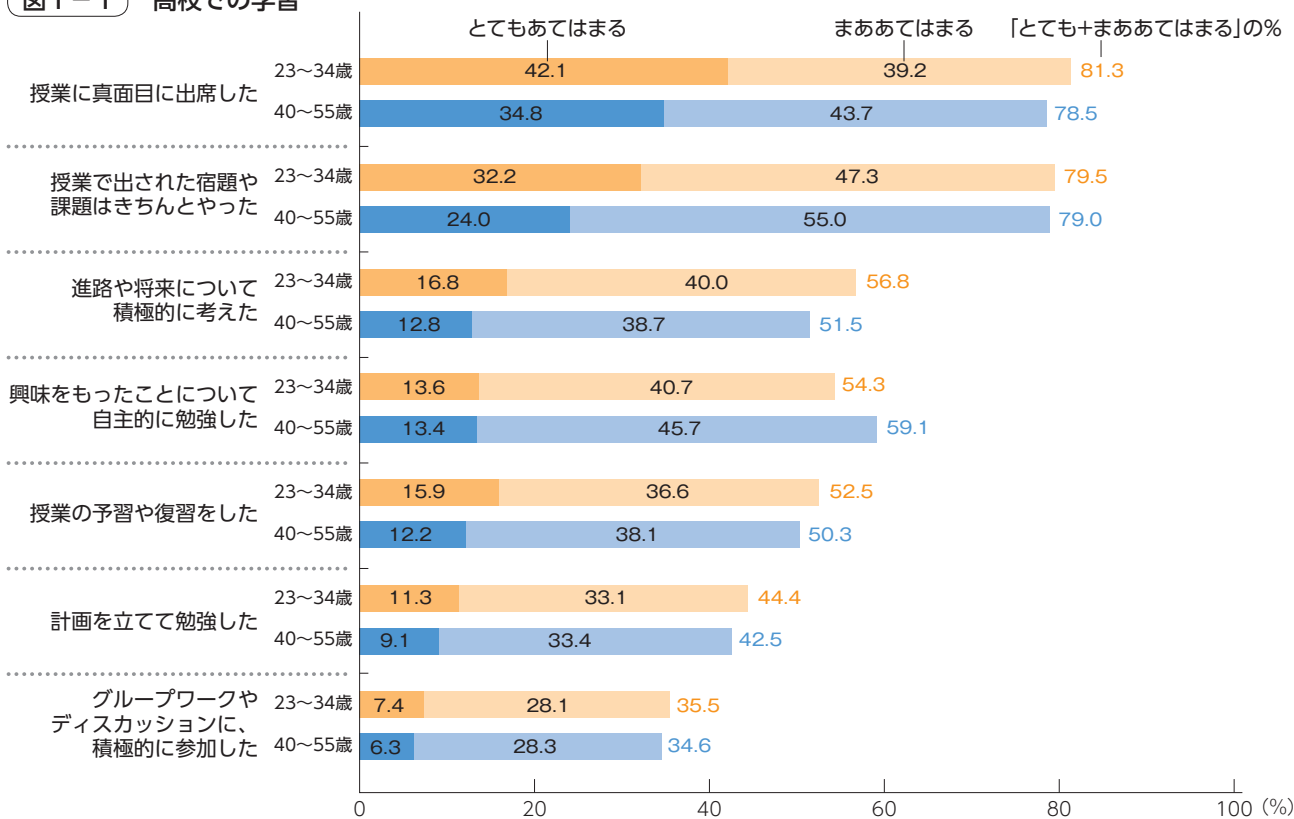
高校時代の学習態度はやや真面目に。一般入試が減少し、推薦・AOでの入学者が増加。

高校時代の授業や勉強の様子を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、「進路や将来について積極的に考えた」に「とても+まああてはまる」と回答した割合が、5.3ポイント差(23～34歳 56.8%、40～55歳 51.5%)であるが、その他の項目に差はみられなかった。ただし、「とてもあてはまる」と回答した割合をみると、「授業に真面目に出席した」が7.3ポイント差(23～34歳 42.1%、40～55歳 34.8%)、「授業で出された宿題や課題はきちんとやった」が8.2ポイント差(23～34歳 32.2%、40～55歳 24.0%)で、やや真面目化している。入試方式をみると、一般入試が減少し、指定校推薦やAO入試が増加している。日常の学習状況や個性や適性など、多面的に評価する入試が増えているようだ。



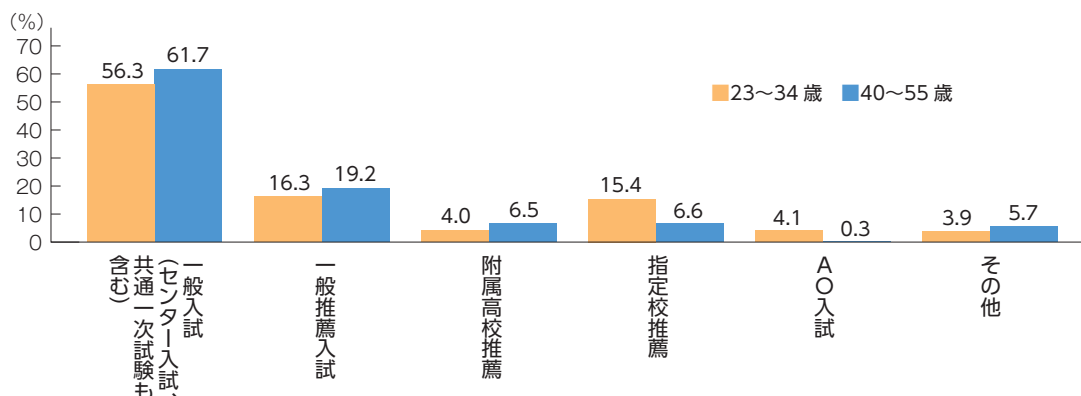
高校時代の授業や勉強の様子にあてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図1-1 高校での学習



大学受験の際の入試方式にあてはまるものをひとつお選びください。

図1-2 進学した大学の入試方式



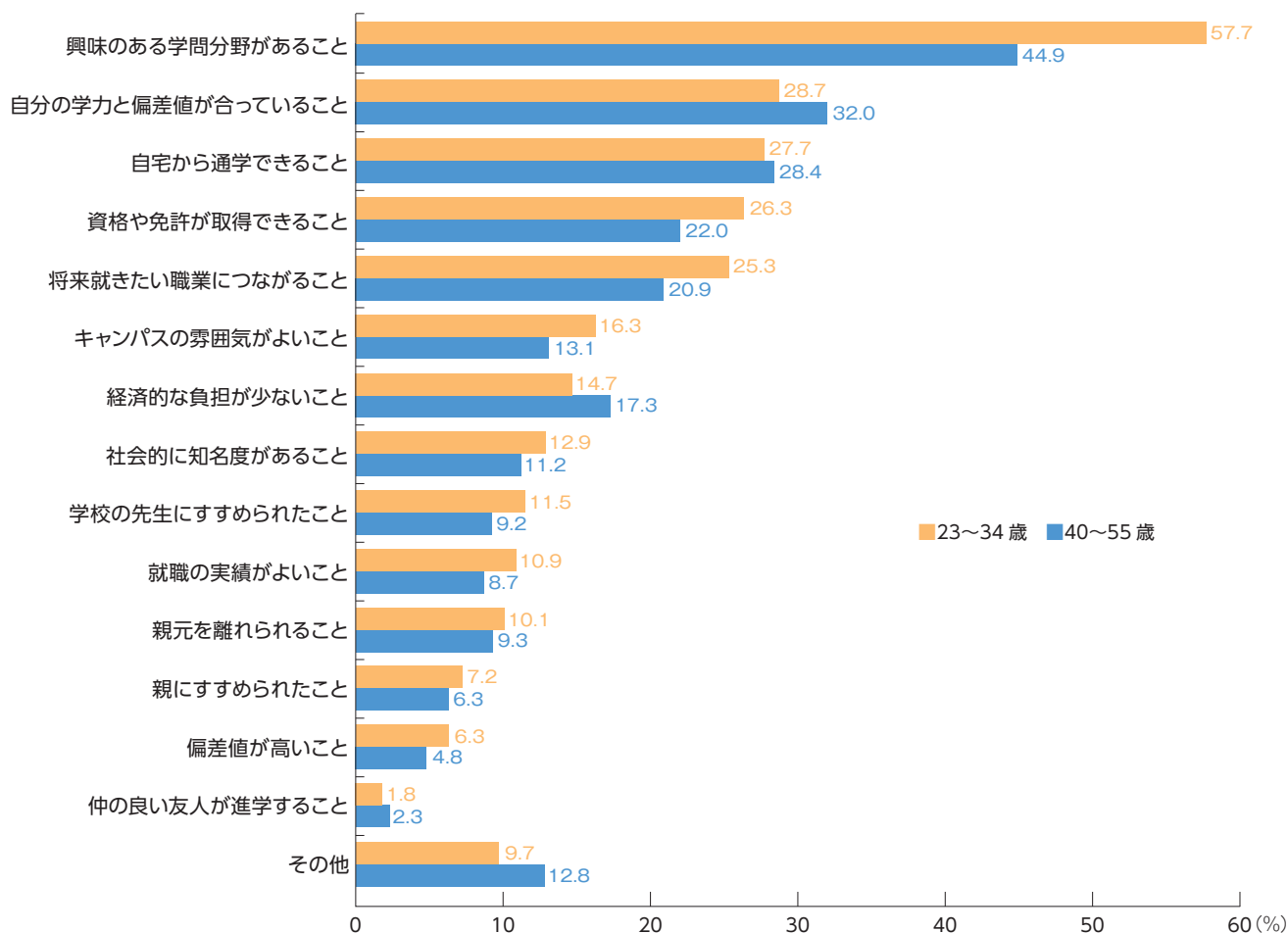
✔ 世代にかかわらず、もっとも多い入学理由は「興味のある学問分野があること」。

大学入学を決めた理由をみると、いずれの世代においても「興味のある学問分野があること」がもっとも多い。さらに23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、興味のある学問分野に加えて、「資格や免許が取得できること」、「将来就きたい職業につながることを選択した割合もやや増加している。学問の内容や資格、将来の職業とのつながりを重視する傾向が強まっているようだ。入学時の満足度をみると、「とても満足して入学した」と回答した割合がやや増加している。



大学に入学を決めた理由にあてはまるものをすべてお選びください。

図2-1 大学入学理由

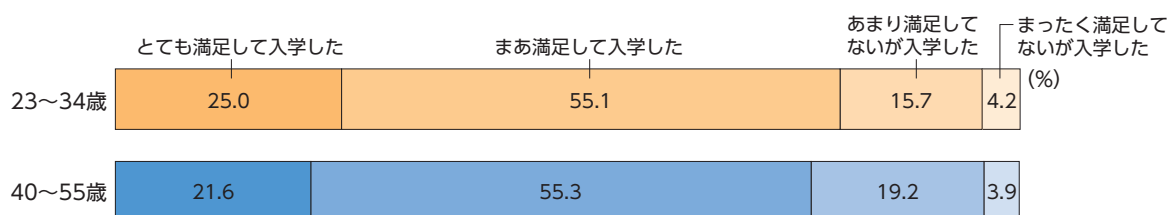


※複数回答。



大学入学時の気持ちにあてはまるものをお選びください。

図2-2 大学入学時の満足度



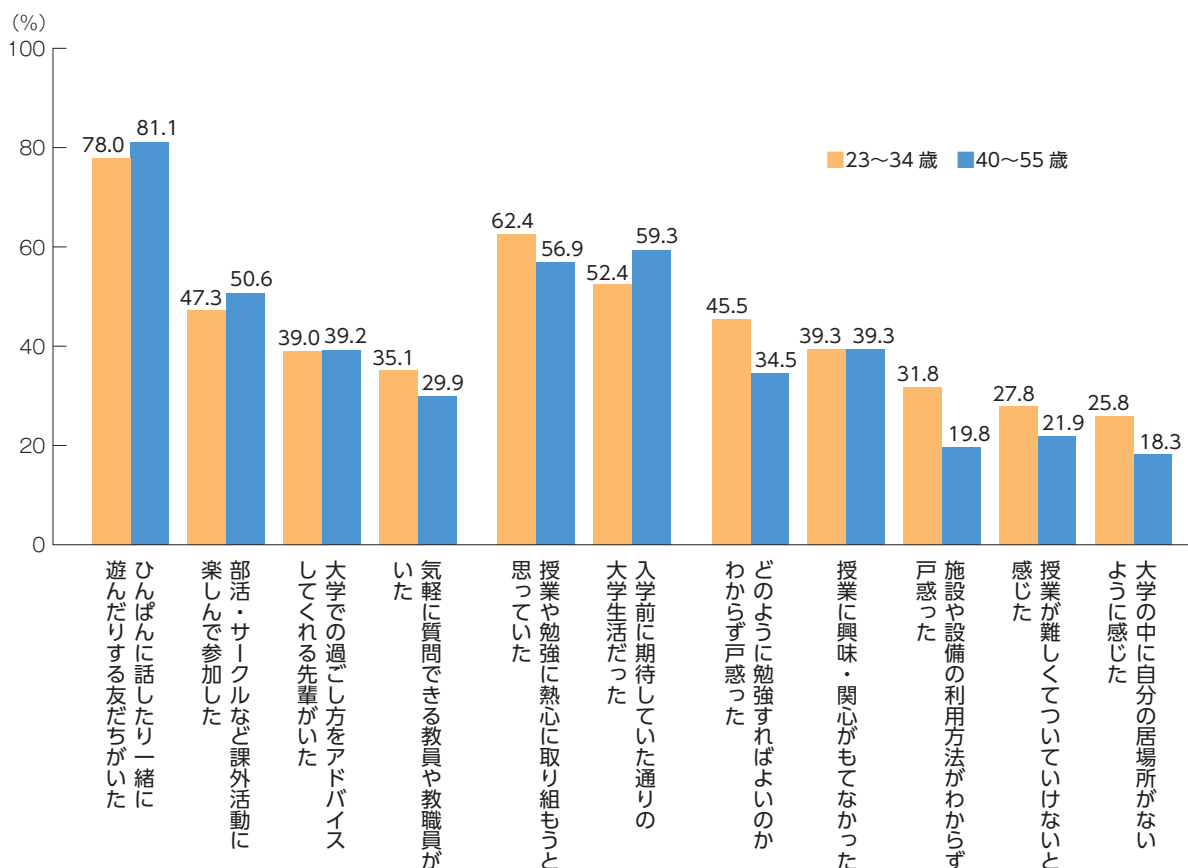
大学への授業・勉強への期待がふくらむ一方、入学後に難しさや戸惑いを感じる割合も増加。

大学入学時の状況を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、友人や先輩との付き合い、部活・サークルへの参加の実態には変化がないものの「気軽に質問できる教員や教職員がいた」に「とても+まああてはまる」と回答した割合が増加していた。入学直後の段階から、教員や教職員が学生と関わる機会は増えているようだ。次に、「授業や勉強に熱心に取り組もうと思っていた」という前向きな姿勢の増加と同時に「授業が難しくついていけないと感じた」、「どのように勉強すればよいかわからず戸惑った」、「大学の中に自分の居場所がないように感じた」など不適応を示す項目も増加している。期待して入学した半面、困難や戸惑いを感じる学生が増えているようだ。入学時の行動タイプについては、「自分から積極的にやりたいことを探しやるほうだった」との回答は約3～4割で、世代間比較でみるとやや減少傾向にあった。



大学に入学してから夏休み頃までの状況を思い出し、あてはまるものをそれぞれひとつお選びください。

図3-1 大学入学時の状況

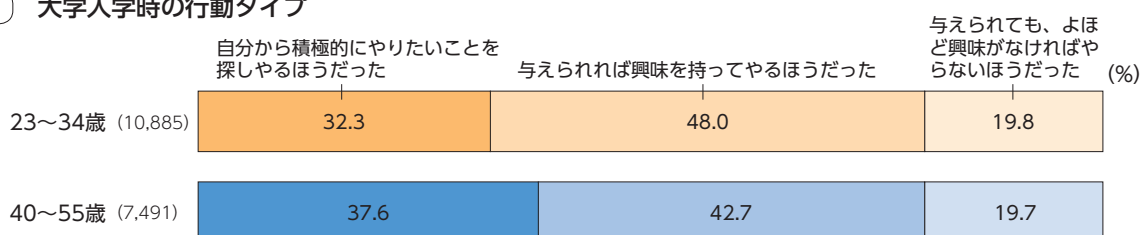


※「とても+まああてはまる」の%。



大学入学時のあなたにあてはまるものを直感的にお選びください。

図3-2 大学入学時の行動タイプ



※「あてはまらない、わからない」と回答した者は、分析から除外する。

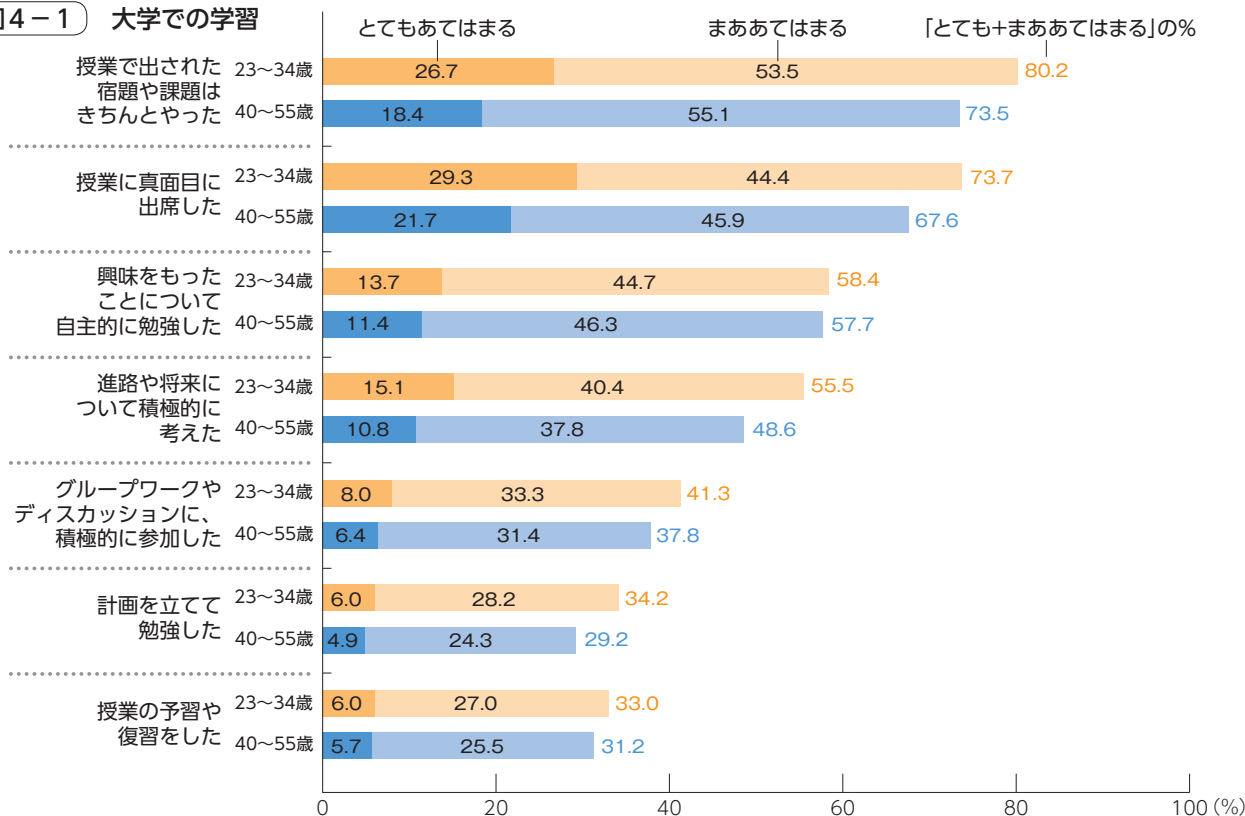
大学での学習態度は真面目化。正課内外ともに大学時代の活動経験が豊富に。

大学時代の授業や勉強の様子を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、「授業で出された宿題や課題はきちんとやった」、「授業に真面目に出席した」、「進路や将来について積極的に考えた」に「とてもあてはまる」と回答した割合が増加している。一方で、「興味をもったことについて自主的に勉強した」、「グループワークやディスカッションに、積極的に参加した」の回答に、大きな差はみられなかった。大学時代に経験したものをみると、サークルや部活動、アルバイトは変化がないが、それ以外の活動が増加しており、大学時代の経験は豊富になっている。



大学時代の授業や勉強の様子にあてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図4-1 大学での学習

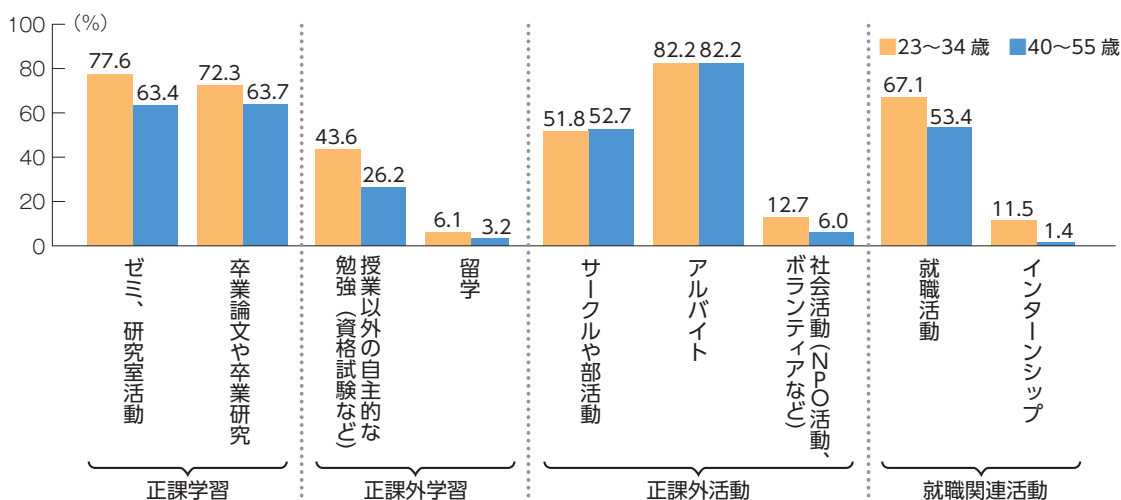


※「とても+まああてはまる」の%。



大学時代に経験したものをすべてお選びください。

図4-2 大学時代の経験



※複数回答。



教員・職員と学生の関わりは増加。設備、制度など学びの環境整備が進む。

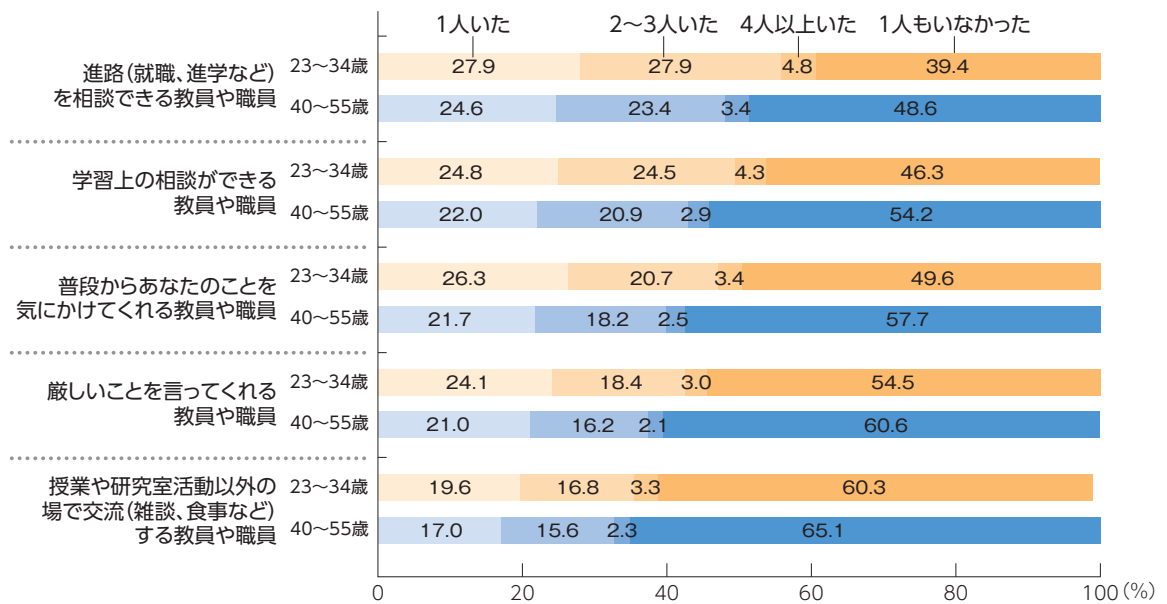
大学時代の教員・職員とのつながりを、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、いずれの項目においても「1人もいなかった」と回答した割合が減少しており、教員・職員と学生との関わりは増加している。とはいえ、依然として、23～34歳の層でも、相談できたり気にかけてくれる教員・職員が「1人もいなかった」と回答した者が4～5割存在しており、まだまだ改善の余地はありそうだ。

学内の設備や制度の利用状況をみると、ほとんどの設備や制度について利用率が増加しており、大学が学びの環境整備をすすめてきた結果といえる。



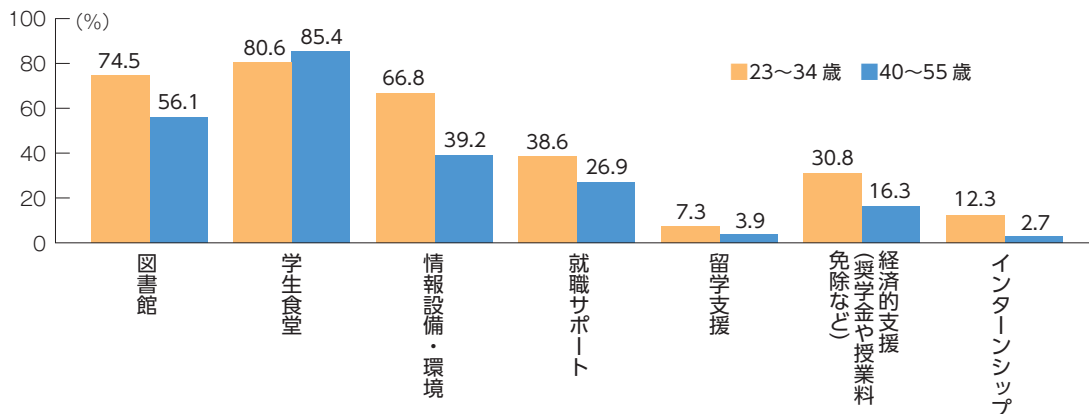
大学時代、次にあげたような教員や職員は合計何人いましたか。
あてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図5-1 教職員とのつながり



大学内の設備や制度の利用状況に、あてはまるものをそれぞれひとつお選びください。

図5-2 設備・制度の利用



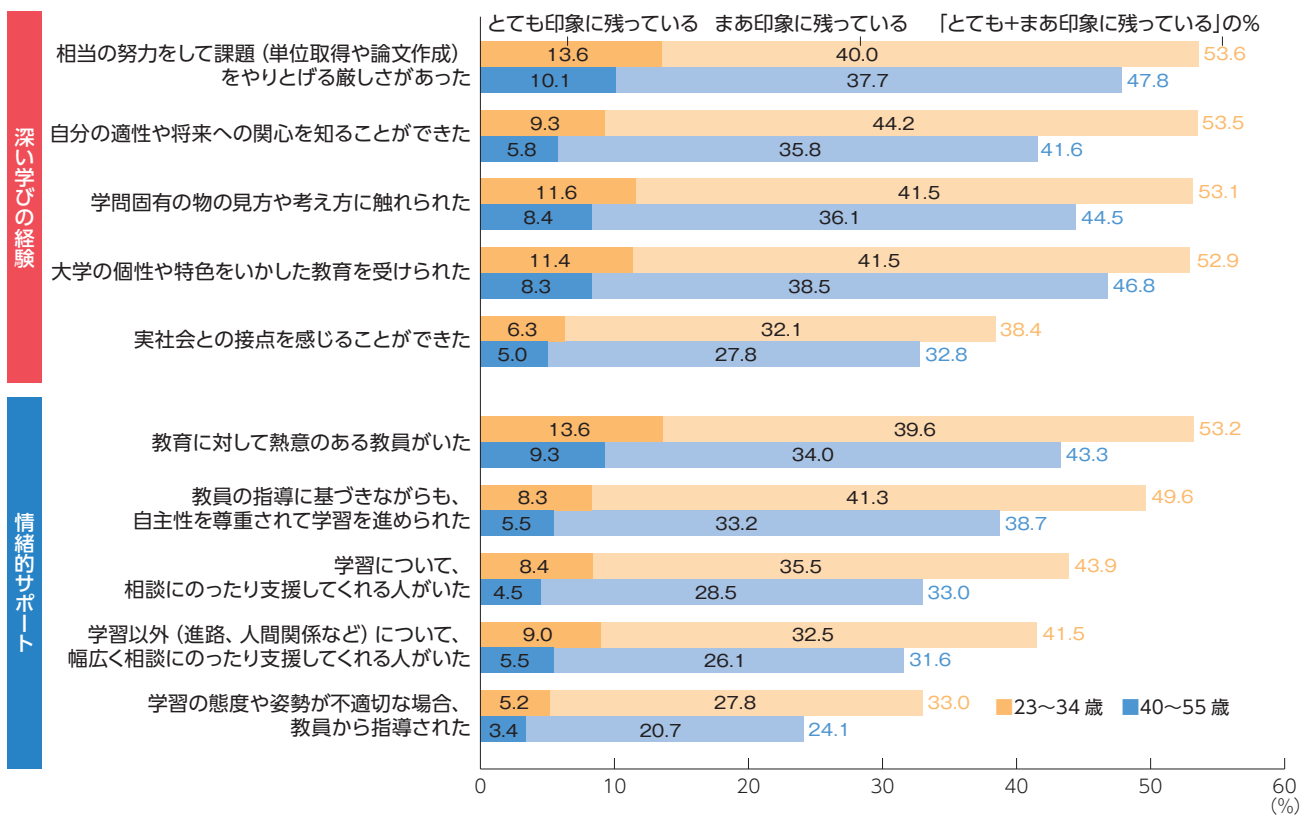
※「よく+ときどき利用した」の%。

大学教育に対する印象は、「深い学びの経験」、「情緒的サポート」とともに強まる傾向。

大学時代に受けた教育の印象を、「深い学びの経験」を示す5項目と「情緒的サポート」を示す5項目にわけてたずねた結果を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみた。いずれの項目も「とても+まあ印象に残っている」と回答した割合は増加している。世代間比較で差がもっとも大きかったのは、「深い学びの経験」の中では「自分の適性や将来への関心を知ることができた」が、11.9ポイント差(23～34歳 53.5%、40～55歳 41.6%)で、23～34歳の層が大学教育に資格や将来の職業とのつながりを求める傾向を強めていること(P8大学入学理由 参照)とも合致する。「情緒的サポート」は、いずれの項目も約10ポイント程度増加しており、大学教員による支援の充実がうかがえる。

Q 大学教育(授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など)を通して、次のような経験はどれくらい現在も印象に残っていますか。あてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図6-1 大学教育の経験(印象)



卒業生が語る印象に残る大学教育とは？



授業でお酒を作ったのは印象に残っています。実際やってみないとわからないことがあった。クラス40人全員が同じことをやっているのに、出来上がったお酒の味はそれぞれ違っていた。最後にみんなで飲んで、順位を付けたのはいい思い出です。



先生より「テーマは何でもよく、興味のあることを研究して論文を書きなさい」と言われた。細かい相談に対しても、丁寧な指導をしてくれた。論文のテーマは先生の専門ではないはずなのに、いろいろ調べて知識を溜めたはずの僕より知識を持っていて、素直にすごいなと思った。

※大学での学びと成長に関するヒアリング調査より。



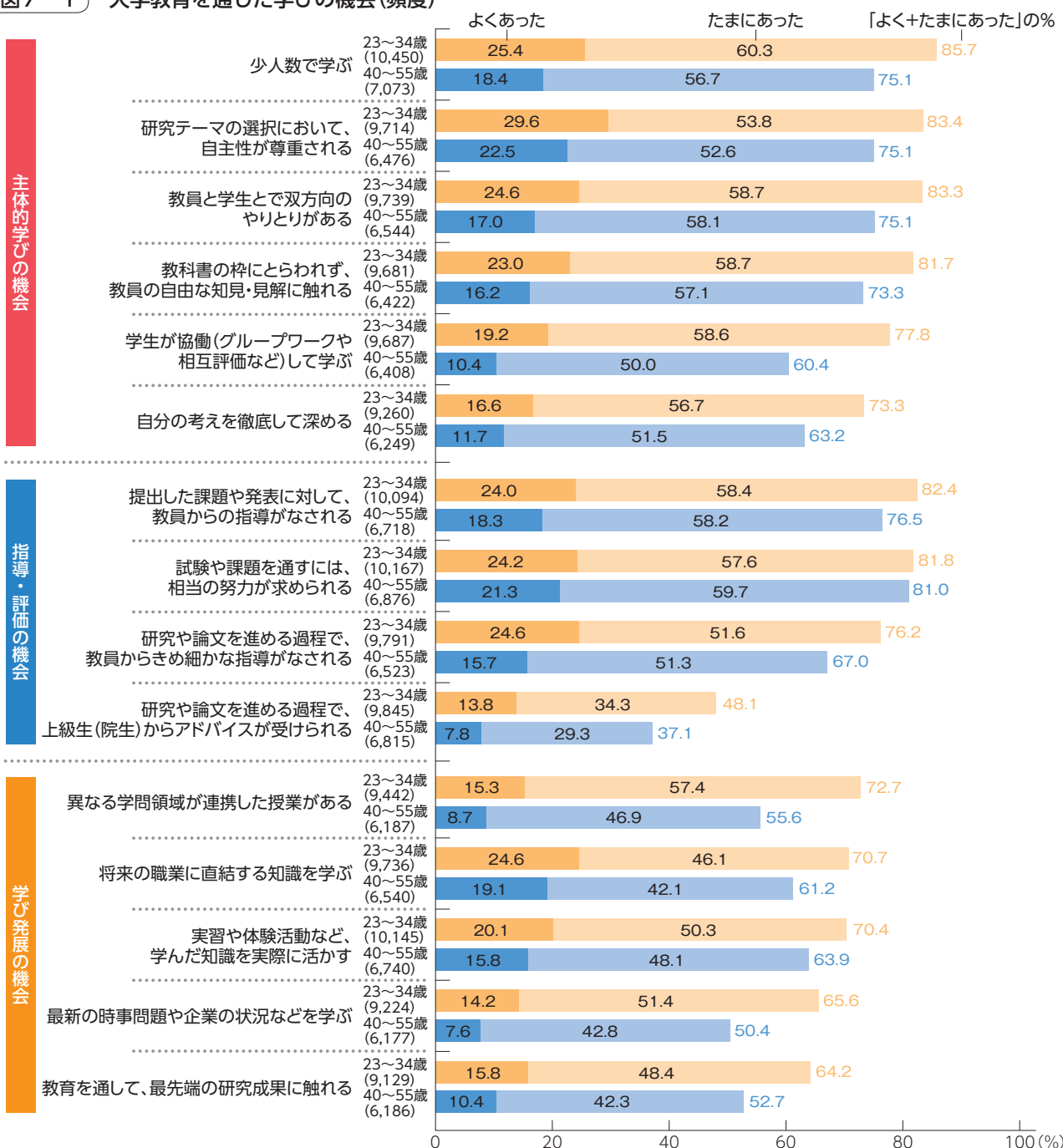
大学教育を通じた学びの機会が多様に。特に学生同士の協働学習や異分野学問と連携した授業が増加。

大学教育を通じた学びの機会の頻度を、「学びに主体的に参加する機会」を示す6項目、「指導・評価を受ける機会」を示す4項目、「学びを何かにつなぐ機会(実社会や異分野学問など)」を示す5項目でたずねた結果を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみた。いずれの項目も「よくあった」と回答した割合は増加しており、学びの機会が多様になっていることがわかる。「よく+たまにあった」の割合をみると、特に「学生が協働(グループワークや相互評価など)して学ぶ」が、17.4ポイント差(23～34歳 77.8%、40～55歳 60.4%)、「異なる学問領域が連携した授業がある」が、17.1ポイント差(23～34歳 72.7%、40～55歳 55.6%)と大きく増加した。



大学教育(授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など)を通して、次のような機会はどれくらいありましたか。あてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図7-1 大学教育を通じた学びの機会(頻度)



※「覚えていない」と回答した者は、分析から除外する。

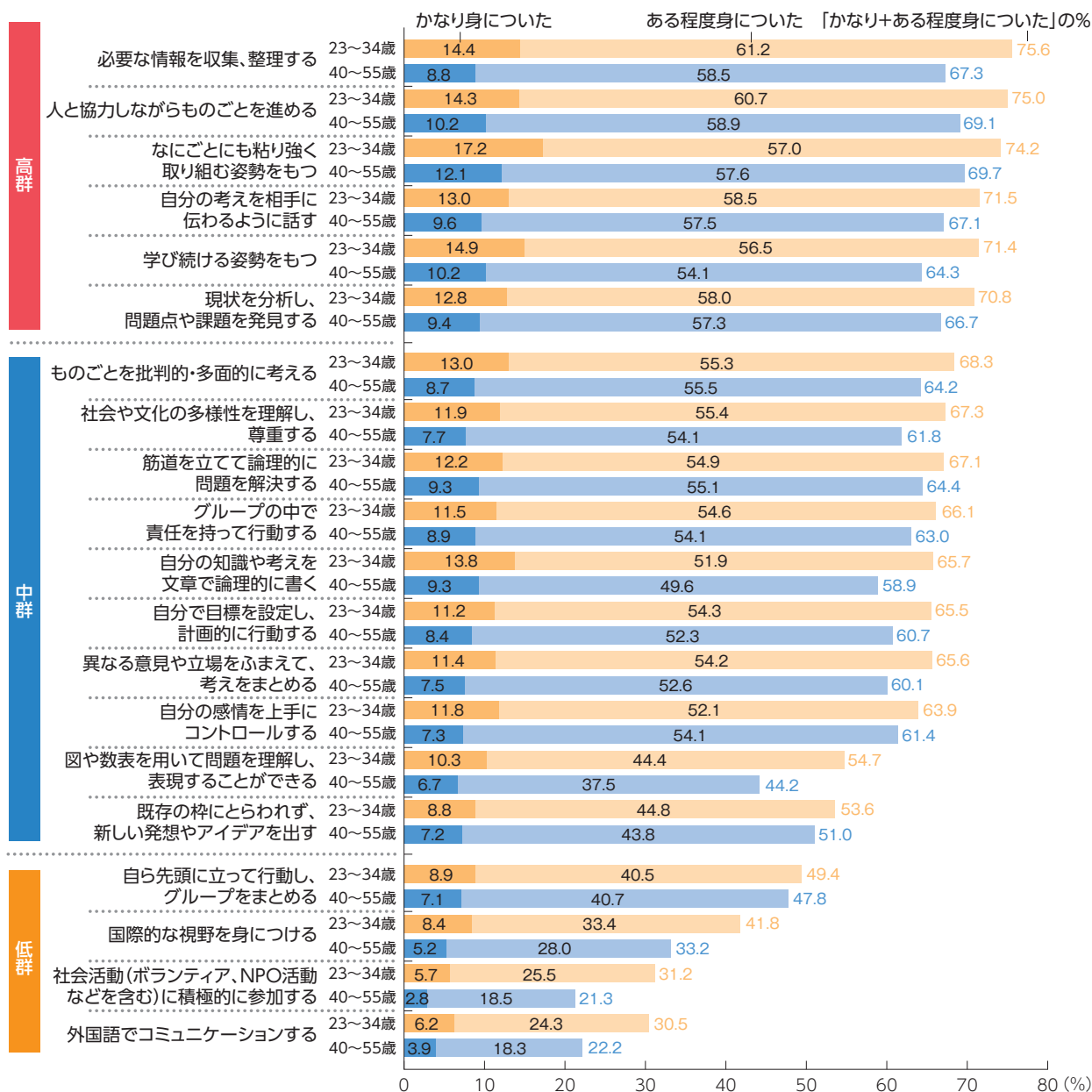
✓ 学習成果の自己評価は向上。情報処理能力と語学力は、特に伸びている。

大学時代の学習成果を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、いずれの項目も「かなり+ある程度身についた」と回答した割合が増加しており、学習成果の自己評価は向上している。特に向上がみられるのは、「必要な情報を収集、整理する」、「図や数表を用いて問題を理解し、表現することができる」といった情報処理を示す項目、「国際的な視野を身につける」、「外国語でコミュニケーションする」といった国際性を示す項目、「社会活動に積極的に参加する」である。

割合の高い項目からの並び順については、世代間に大きな差はない。大学で習得しやすいものと、しにくいものに変化がみられないといえる。23～34歳の回答を一定の特定範囲(高群70%以上、中群50～70%未満、低群50%未満)に分けて特徴をみると、学習成果として評価が高い順に、情報処理、協調性、粘り強さ、次いで、思考力、課題解決力、計画的行動力、表現力、最後に、リーダーシップ、語学力といった要素を示す項目が並んだ。

Q 大学生生活全体(大学時代のあらゆる活動)を通じて、次のようなことはどの程度身についたと思いますか。それぞれについて、あてはまるものをひとつお選びください。

図8-1 大学生生活全体から身についたこと





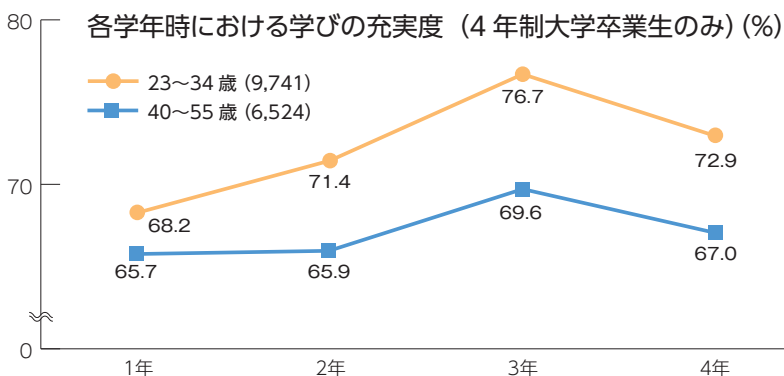
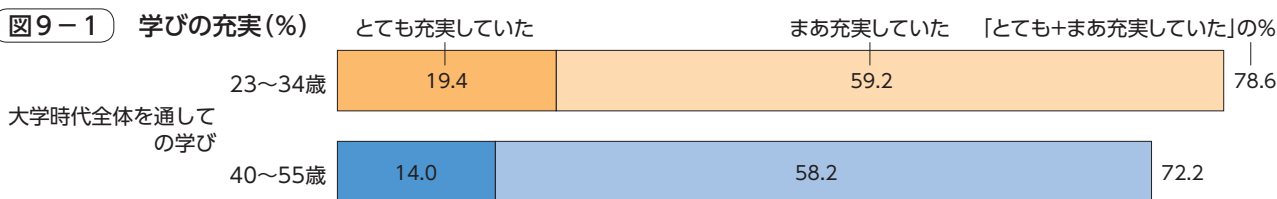
23～34歳の約8割、40～55歳の約7割が、大学時代に学びの充実感と成長実感があったと回答。

大学時代の学びの充実度を世代間比較でみると、「とても+まあ充実していた」と回答した比率は23～34歳で78.6%、40～55歳で72.2%となっている。同様に、成長実感についても、「とても+まあ実感した」と回答した割合は23～34歳で77.5%、40～55歳で72.5%となっており、いずれも増加の傾向にある。

また、4年制大学卒業者に限って、学年別に学びの充実度と成長実感を見たところ、いずれも大学1、2年時は低調に推移し、学びの充実度は3年時、成長実感は4年時にピークを迎えている。この傾向は世代間で差がなく、大学前半の過ごし方は世代を越えて変わらない課題であるようだ。



大学の各学年における学びを振り返り、充実度についてあてはまるものをひとつお選びください。



卒業生が語る
学びの充実を
感じた経験とは？

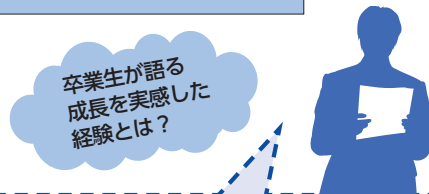
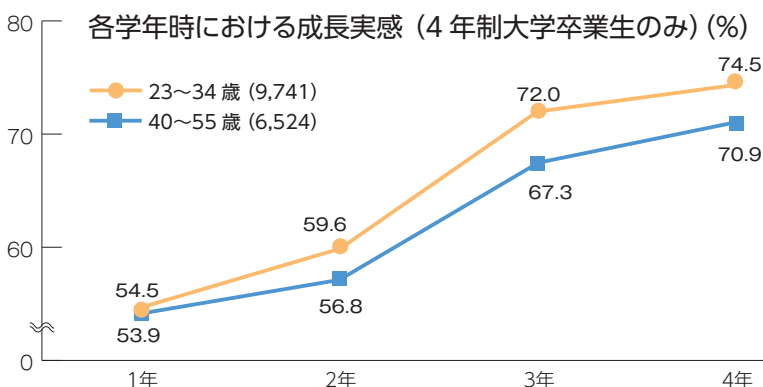
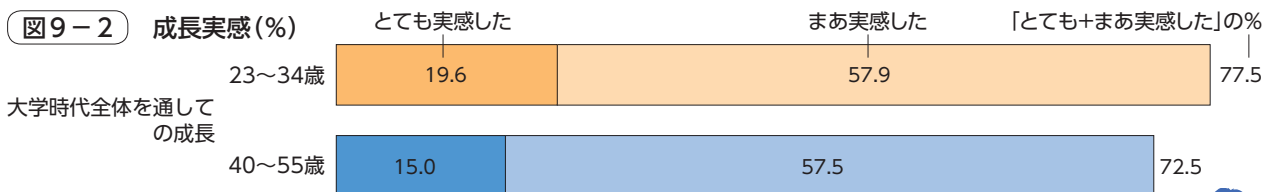
3年、4年の授業で、ようやく商学部ならではの専門的な知識を勉強していると実感。毎回小テストで気が抜けなかった。その小テストの解説が次の授業の最初にあり、少人数でしっかりと教えてくれているな、という感じが嬉しかった。

※「とても+まあ充実していた」の%。

※大学での学びと成長に関するヒアリング調査より。



大学の各学年における成長を振り返り、成長実感についてあてはまるものをひとつお選びください。



卒業生が語る
成長を実感した
経験とは？

4年生の一年間は朝から晩まで実験。うまくいかないときは先生に相談しながら、実験の条件をちょっとずつ変えて何度も繰り返して。結果がわからないことをやっているの、うまくいくことのほうが少ないです。この一年で落ち込まない、粘り強さがついたように思います。

※「とても+まあ実感した」の%。

※大学での学びと成長に関するヒアリング調査より。



卒業後の年数が経つほど、大学教育に内容面の充実や能動的な学習態度を望む傾向。

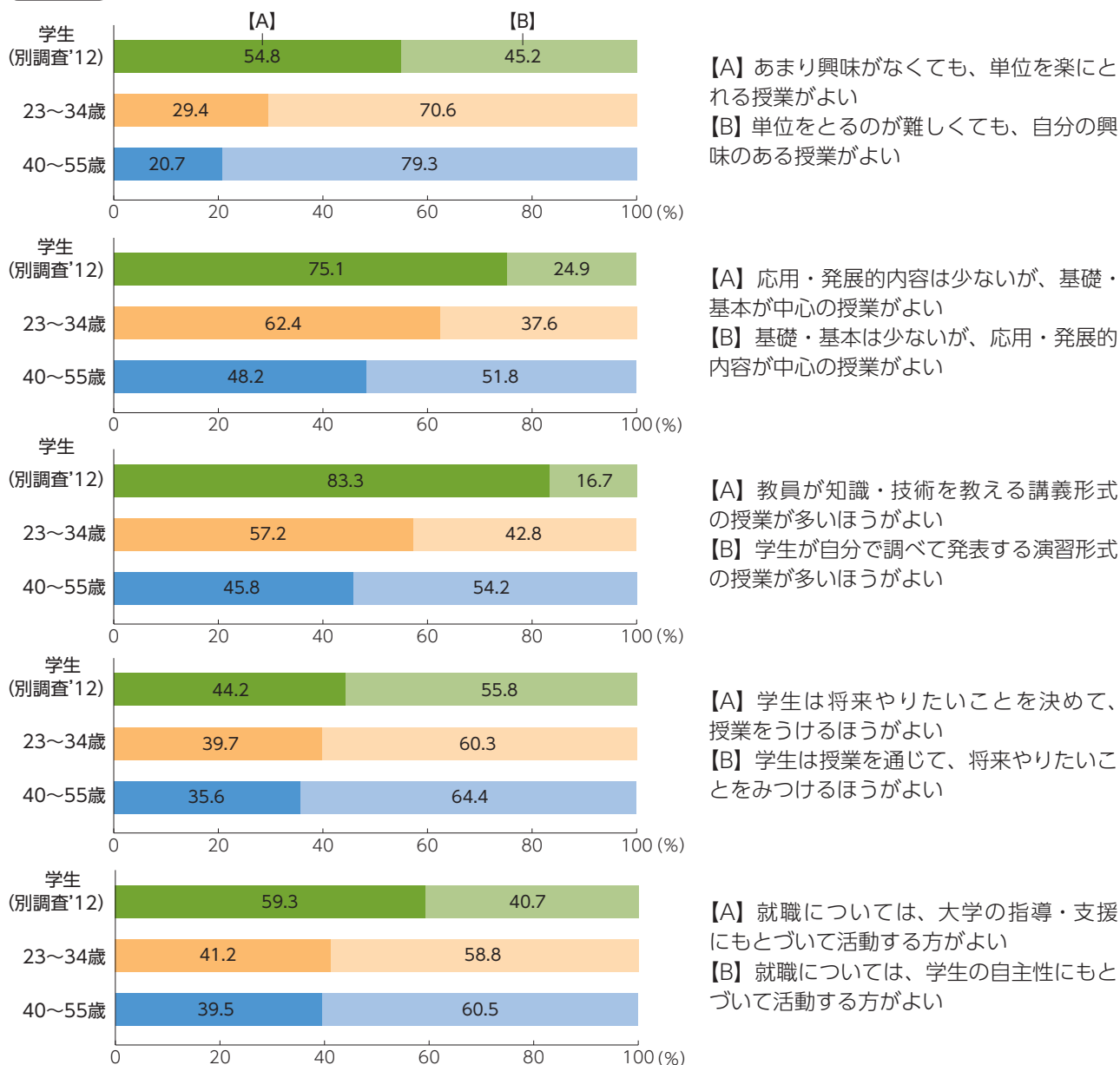
大学教育に対して、現在の自分の考えに近いほうを選んでもらった結果である。2012年に大学生4,911名を対象に行った「大学生の学習・生活実態調査」の結果と、本調査の世代間別の結果をあわせてみたい。

上3項目はいずれも、学生から23～34歳、40～55歳と年齢層が上昇するにつれ、【A】「あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい」、「応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい」、「教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい」を選択する割合が減少している。在学生ほど楽な単位取得や、受け身の授業姿勢を好むが、卒業後社会に出た視点からすると、より厳しい環境で学習すべきと判断した結果だろう。また下2項目も同様に年齢層が上昇するにつれ、【A】「学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい」、「就職については、大学の指導・支援にもとづいて活動するほうがよい」を選択する割合が減少しており、若年層ほど大学教育と職業のつながりや就職支援を求めている。



大学教育について、現在のお考えに近いのはどちらですか。

図10-1 大学教育に対する考え



※全9項目のうち、特に世代間比較で差のみられた5項目を抜粋。

※学生の回答結果は、「大学生の学習・生活実態調査」(2012年 全国の大学1～4年生4,911名を対象にベネッセ教育総合研究所が実施)より引用。



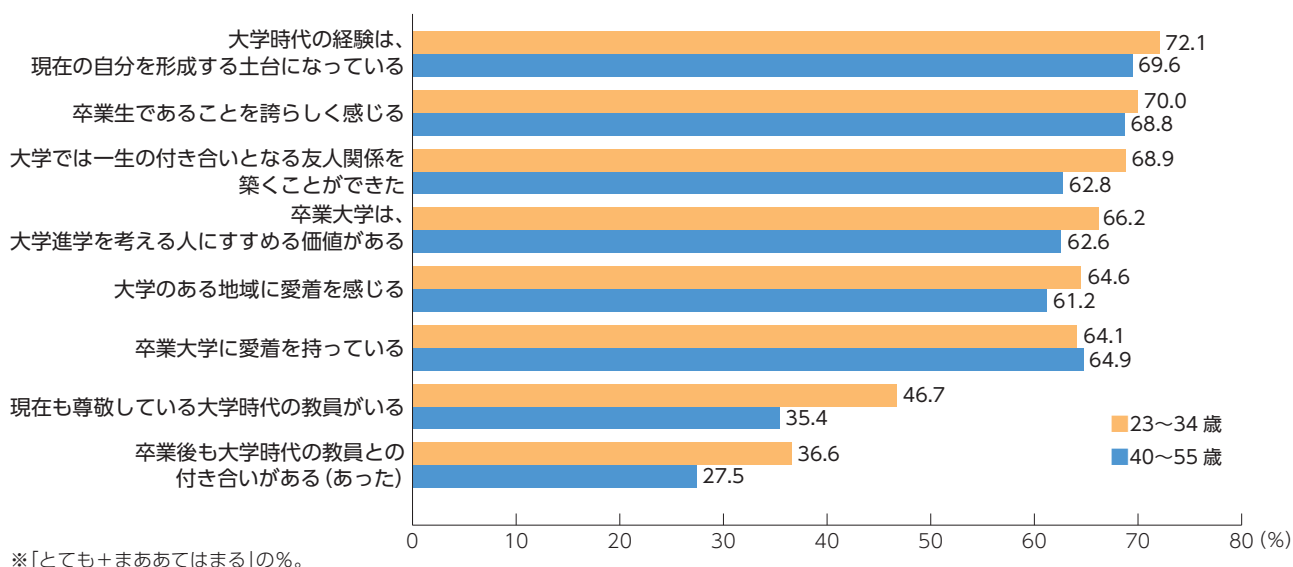
約7割が、大学時代を自分の土台となる経験だととらえ、卒業大学に誇りを感じるという回答。

卒業大学への思いを、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、教員や友人といった人間関係を示す項目を除いては、大きな差はみられなかった。人間関係の差については、前述した教員・教職員との関わりの増加（P11 大学での学びの環境 参照）に加え、卒業後の年数の差が影響した結果であろう。「大学時代の経験は、現在の自分を形成する土台となっている」、「卒業生であることを誇らしく感じる」といった項目に「とても+まああてはまる」と回答した割合は約7割である。卒業生の約7割は、大学時代を現在の自分を形成する上でポジティブな経験であったととらえている。また「日本の50年後の未来は明るい」に「とても+まあそう思う」と回答した割合は、23～34歳で32.5%、40～55歳で27.4%にとどまるのに対し、「今の調子でやっていけば、これから起きることにも対応できる」に「とても+まあそう思う」と回答した割合は、23～34歳で65.2%、40～55歳で70.8%である。未来は必ずしも明るくないとしながらも、これから起きることに対応する自信がある者が、比較的多く存在することがわかった。



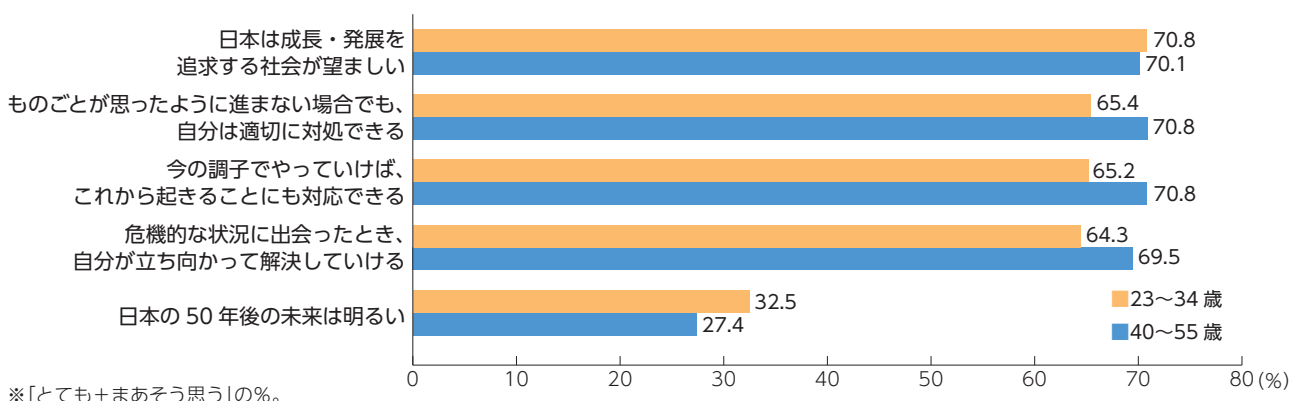
卒業した大学について、現在のお気持ちや状況にあてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図11-1 卒業大学に対する考え



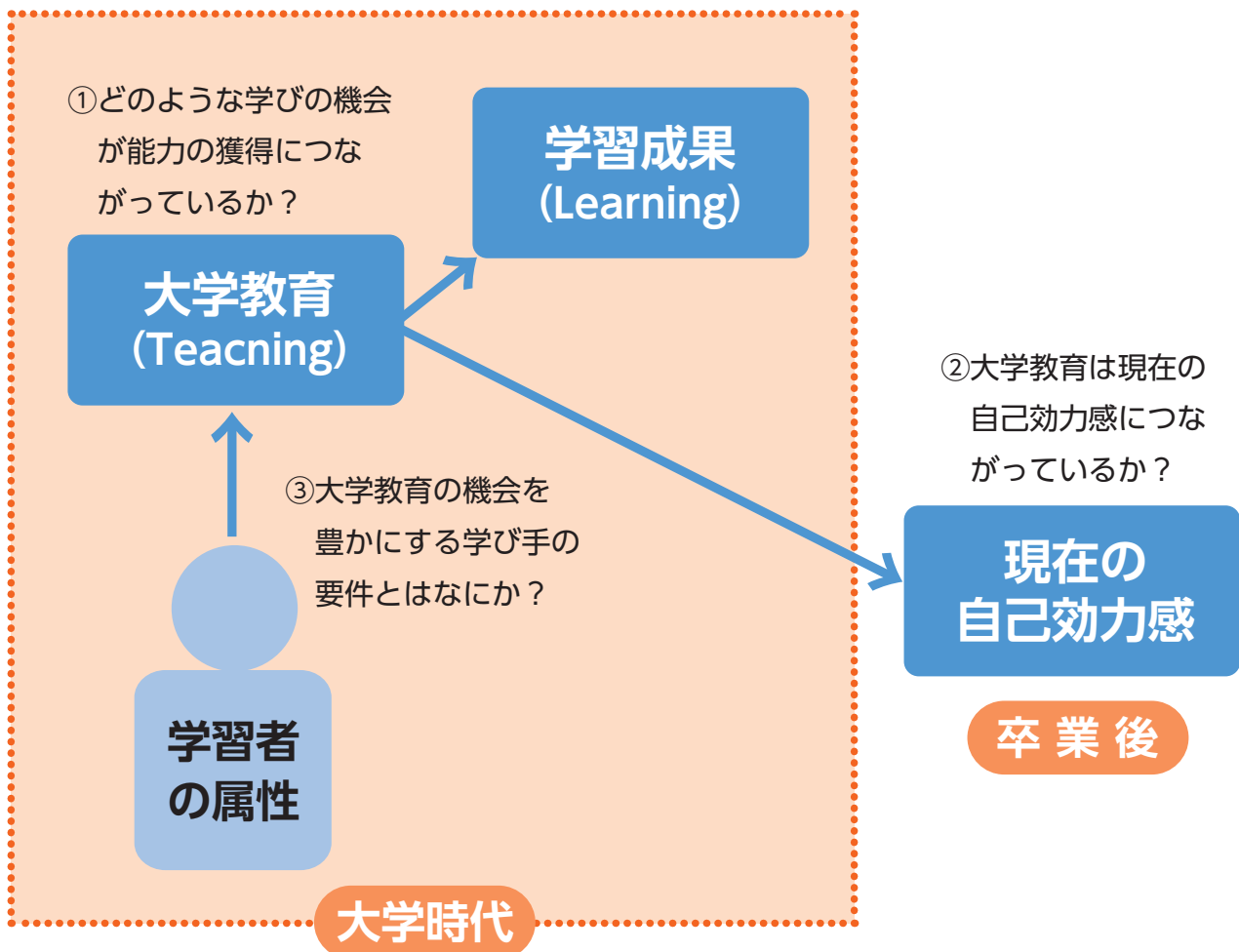
現在のお考えにあてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図11-2 現在の考え



大学教育と学習成果、さらに卒業後の自己効力感への関連

第Ⅰ部では、大学教育改革前後の世代の学びの機会や学習成果などを比較することによって、その変化をみてきた。第Ⅱ部では、若手の卒業生(23歳～34歳)のデータを使用し、大学での学びの機会と学習成果、さらに卒業後の自己効力感の関係を明らかにする。大学卒業後、一定期間を経て卒業生たちは、自身の大学時代の学びを振り返り、どのような力を身につけたと感じているのだろうか。さらに、それらは現在の自己効力感にどうつながっているのだろうか。ここでは、以下の3点を中心に大学教育と学習成果、現在の自己効力感の関係をみていく。



①どのような学びの機会が、能力の獲得につながっているか？ —卒業生の視点から振り返る Teaching と Learning の関係—

第1部では、大学が内容・形式ともに多様な教育プログラムを提供するようになってきている傾向が明らかになったが、これらの学びの機会は、卒業生たちの能力やスキルの獲得にどれくらいつながっているのだろうか。ここでは23～34歳のデータを用いて、大学が提供した学びの機会と獲得した能力・スキルの関係をみてみよう。

卒業生が大学時代に経験した主な学びの機会と獲得した能力・スキル

まず卒業生たちがどのような教育を受けたのか、大学時代に経験した学びの機会に関する15項目を使用し、主な内容を調べたところ、「ゼミ型」「課題達成型」「応用実践型」の3つの学びが確認された^(*)。それぞれの学びの内容を構成する質問項目は以下の通りである。

〈大学時代に経験した学び〉

【ゼミ型】(α = .746) : 「教員と学生で双方向のやりとりがある」「少人数で学ぶ」「研究テーマの選択において、自主性が尊重される」「教科書の枠にとらわれず、教員の自由な知見・見解にふれる」

【課題達成型】(α = .742) : 「研究や論文を進める過程で、教員からきめ細やかな指導がなされる」「提出した課題や発表に対して、都度教員からの指導がなされる」「試験や課題を通すには相当の努力が求められる」「研究や論文を進める過程で、上級生(院生)からアドバイスが受けられる」

【応用実践型】(α = .690) : 「実習や体験活動など、学んだ知識を実際に活かす」「異なる学問領域が連携した授業がある」「将来の職業に直結する知識を学ぶ」「教育を通して最先端の研究成果に触れる」

次に、卒業生が大学時代を通じて身につけたと考えている代表的な能力・スキルを明らかにするために、大学時代の学習成果に関する20項目を用いて、左記と同様に探索的分析を試みた。その結果、「論理的思考力」「リーダーシップ・チームワーク」「国際性・社会性」の3つの能力・スキルが確認された^(*)。各能力・スキルを構成する質問項目は、以下の通り。

〈大学時代に獲得した能力・スキル〉

【論理的思考力】(α = .899) : 「筋道を立てて論理的に問題を解決する」「現状を分析し、問題点や課題を発見する」「ものごとを批判的・多面的に考える」「自分の知識や考えを文章で論理的に書く」「必要な情報を収集、整理する」「学び続ける姿勢をもつ」「図や数表を用いて問題を理解し、表現することができる」

【リーダーシップ・チームワーク】(α = .849) : 「自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる」「異なる意見や立場をふまえて、考えをまとめる」「グループの中で責任を持って行動する」「人と協力しながらものごとを進める」

【国際性・社会性】(α = .772) : 「国際的な視野を身につける」「外国語でコミュニケーションする」「社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)に積極的に参加する」

育成したい能力・スキルにあわせた学びの機会の提供を

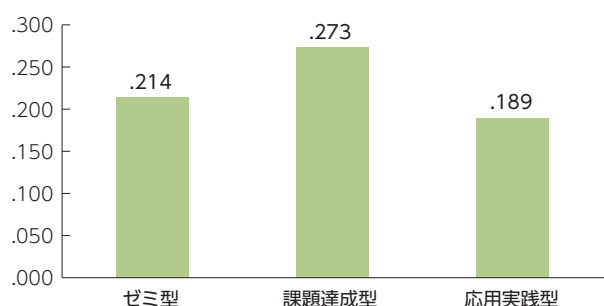
では上記のような学びの機会が、大学時代に獲得した能力・スキルにどの程度影響を与えているかを比べてみよう。そこで、卒業生の代表的な学びである「ゼミ型」「課題達成型」「応用実践型」の経験頻度(得点)を説明変数に、代表的な能力・スキルである「論理的思考力」「リーダーシップ・チームワーク」「国際性・社会性」の得点を目的変数とした重回帰分析を行った^(*)。

図1は、分析から得られた「論理的思考力」に対する各学びの影響力(標準化回帰係数)を比較したものである。結果をみると、「課題達成型」(0.273)の影響が最も大きく、その次に「ゼミ型」(0.214)、「応用実践型」(0.189)が続いている。影響力の大きさに若干の差はみられるものの、論理的思考力のような、社会で生活し、働く上で必要な基礎的能力の育成に対しては、どの学びもプラスの効果がある

ようだ。

この結果は、論理的思考力の高め方が「一通り」ではないことを示している、と言いかえることもできるだろう。学生の属性やタイプによって学び方に向き不向きがあることを考えると、大学として多様な教育機会を準備、提供していくことが、さまざまなタイプの学生の論理的思考力の育成につながると言えそうだ。

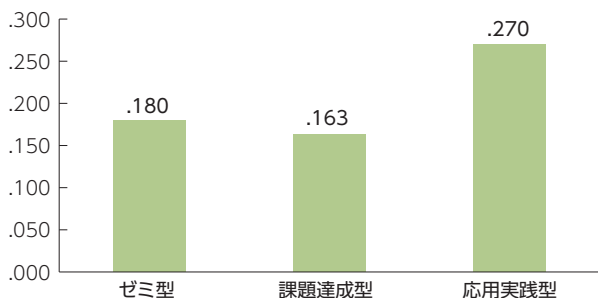
図1 「論理的思考力」に対する影響力の比較



① 大学教育と学習成果、さらに卒業後の自己効力感への関連／
① どのような学びの機会が、能力の獲得につながっているか？

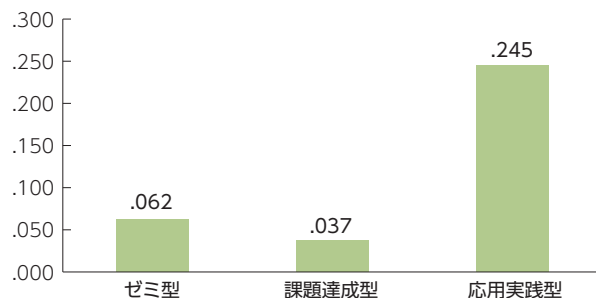
① どのような学びの機会が、能力の獲得につながっているか？
—卒業生の視点から振り返る Teaching と Learning の関係—

図2 「リーダーシップ・チームワーク」に対する
影響力の比較



では、「リーダーシップ・チームワーク」や「国際性・社会性」に対するそれぞれの学びの影響力はどのようなものだろうか。図2、図3はその結果をグラフに示したものである。それぞれの学びの機会が与える影響をみると、「リーダーシップ・チームワーク」や「国際性・社会性」を伸ばす上では、「ゼミ型」「課題達成型」よりも、「応用実践型」をより多く経験することが学習成果につながる可能性がある。特に「国際性・社会性」に代表される国際的な視野や外国語能力については（応用実践型 0.245 > ゼミ型 0.062、課題達成型 0.037）、学んだ知識を試行錯誤しながら実際に活用する機会をもてるかが、能

図3 「国際性・社会性」に対する影響力の比較



力獲得に大きな影響を与えそうだ。

今後、大学に対してどのような学生を受け入れ、どのような教育を行い、どのような人材を社会に送り出すか、それらを明確にすることがさらに求められつつあるが、大学として育てたい能力・スキルにあわせてどのような教育機会を準備、提供していくかを検討する際に、今回のような大学を卒業し、一定期間を経た卒業生たちが、大学時代の Teaching と Learning をどのように評価しているか、「大学教育の遅効性」も考慮しながら検討がなされていくべきではないか。

(ベネッセ教育総合研究所 佐藤昭宏)

【注釈】

- ※1 大学教育を通じた学びの機会に関する項目（p 13、15 項目）に対して探索的因子分析を行い、その結果を参考に各因子に対して負荷量の高い項目を加算し、指標化（得点化）した。得点化にあたっては、「よくあった」に「3」、「たまにあった」に「2」、「まったくなかった」「覚えていない」に「1」を割り当てた。「覚えていない」は、ここでは主観的な判断として「まったくなかった」に該当するとみなし「1」を割り当てている。なお、得点化した指標の妥当性を示す α 係数は本文中に記載している。
- ※2 大学時代の学習成果に関する項目（p 14、20 項目）に対して探索的因子分析を行い、その結果を参考に各因子に対して負荷量の高い項目を加算し、指標化（得点化）した。得点化にあたっては、「かなり身についた」に「4」、「ある程度身についた」に「3」、「あまり身につけていない」に「2」、「まったく身につけていない」に「1」を割り当てた。なお、得点化した指標の妥当性を示す α 係数は本文中に記載している。
- ※3 各重回帰分析の結果は以下の通り。

■「リーダーシップ・チームワーク」の規定要因

	非標準化係数 B	標準化係数 ベータ	有意確率
ゼミ型	.204	.180	***
課題達成型	.184	.163	***
応用実践型	.333	.270	***
(定数)	5.522		***
調整済み決定係数 = .277			
モデル適合度 $p=0.000$			
N=11,612			
a. 従属変数（合計得点）リーダーシップ・チームワーク			

* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$.

■「論理的思考力」の規定要因

	非標準化係数 B	標準化係数 ベータ	有意確率
ゼミ型	.441	.214	***
課題達成型	.561	.273	***
応用実践型	.423	.189	***
(定数)	11.595		***
調整済み決定係数 = .337			
モデル適合度 $p=0.000$			
N=11,612			
a. 従属変数（合計得点）論理的思考力			

* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$.

■「国際性・社会性」の規定要因

	非標準化係数 B	標準化係数 ベータ	有意確率
ゼミ型	.061	.062	***
課題達成型	.037	.037	**
応用実践型	.264	.245	***
(定数)	3.899		***
調整済み決定係数 = .097			
モデル適合度 $p=0.000$			
N=11,612			
a. 従属変数（合計得点）国際性・社会性			

* : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$.

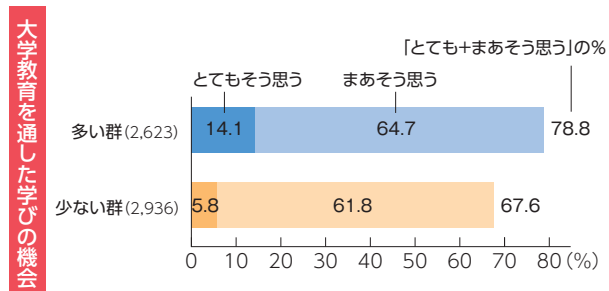
②大学教育は現在の自己効力感につながっているか？ —卒業生の視点から振り返る Teaching と現在の自己効力感の関係—

大学教育を通した学びの機会が多かった卒業生ほど、現在の自己効力感を持っている

次に、大学教育を通した学びの機会と、卒業生の自己効力感との関連をみてみよう。大学教育を通した学びの機会をたずねる項目（P13 参照）の回答結果を点数に換算し（「よくあった」= 3点、「たまにあった」= 2点、「まったくなかった」= 1点）合算した。さらに合算結果が、23～34歳での平均値を上回ったものを「多い群」、下回ったものを「少ない群」として設定した。以上の学びの機会と現在の自己効力感をたずねた3項目でクロス分析を行った。なお、分析には23～34歳のデータを使用した。

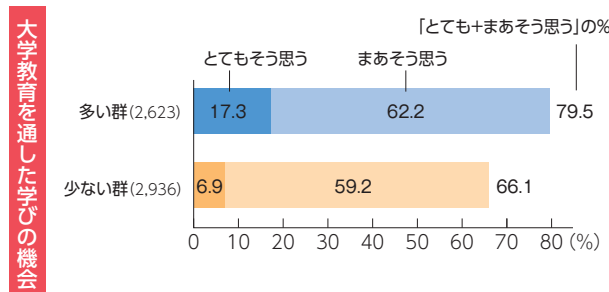
■大学教育を通した学びの機会別 現在の自己効力感

①ものごとが思ったように進まない場合でも、自分は適切に対処できる



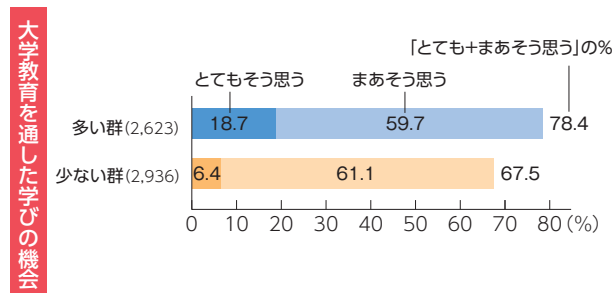
■大学教育を通した学びの機会別 現在の自己効力感

②危機的な状況に出会ったとき、自分が立ち向かって解決していける



■大学教育を通した学びの機会別 現在の自己効力感

③今の調子でやっていけば、これから起きることにも対応できる



※「大学教育を通した学びの機会」とは、教育の機会をたずねる設問 15 項目（P 13 参照）の回答結果を点数に換算（「よくあった」= 3点、「たまにあった」= 2点、「まったくなかった」= 1点）し合算した。合算結果が、23～34歳での平均値を上回ったものを「多い群」、下回ったものを「少ない群」として設定した。

※教育の機会をたずねる設問 15 項目（P 13 参照）に対し、ひとつでも「覚えていない」と回答した者は、分析から除外した。

「とても+まあそう思う」と回答した比率をみると、「ものごとが思ったように進まない場合でも、自分は適切に対処できる」は、大学教育を通した学びの機会が「多い群」が78.8%であるのに対し、「少ない群」は67.6%で11.2ポイントの差、「危機的な状況に出会ったとき、自分が立ち向かって解決していける」は、「多い群」が79.5%であるのに対し、「少ない群」は66.1%で13.4ポイントの差、「今の調子でやっていけば、これから起きることにも対応できる」は、「多い群」が78.4%であるのに対し、「少ない群」は67.5%で10.9ポイントの差である。このことから、大学教育を通しての学びの機会が多い群ほど、卒業後の自己効力感が高いことが明らかとなった。

今回の調査で自己効力感として設定した3項目は、先行き不透明といわれるこれからの時代を生きる上で重要な要素を示すものである。大学が、さまざまな学びの機会を提供することは、学生の卒業後の人生を考える上でも大切な使命だといえる。

（ベネッセ教育総合研究所 松本留奈）

①どのような学びの機会が、能力の獲得につながっているか？
②大学教育は現在の自己効力感につながっているか？

③大学教育の機会を豊かにする学び手の要件とはなにか？

第Ⅱ部①②から、大学時代の学びによって学習成果が異なること(質の問題)や大学時代に学びの機会をどれだけ確保できていたかが、社会に出てからの自己効力感にもつながっていること(量の問題)が明らかとなった。よりよい大学教育の実現のためには、教育を提供する大学側の努力は不可欠だが、受ける学び手側が備えておくべきこともあるのではないだろうか。大学教育をより豊かな機会として享受するための学び手の要件について、詳しくみてみよう。

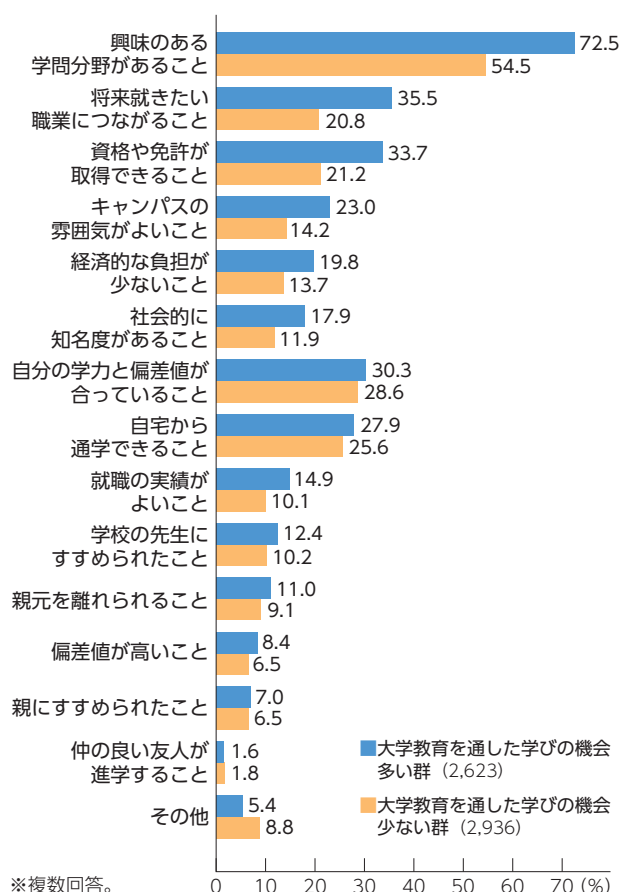
P 21 同様、大学教育を通した学びの機会をたずねる項目(P 13 参照)の回答結果を点数に換算し(「よくあった」=3点、「たまにあった」=2点、「まったくなかった」=1点)合算した。合算結果が、その平均値を上回ったものを大学教育を通した学びの機会が「多い群」、下回ったものを大学教育を通し

た学びの機会が「少ない群」として設定した。なお、分析には、23～34歳のデータを使用した。大学教育を受ける前の状況(高校や入学時)に関する設問を中心に、大学教育を通した学びの機会が多い・少ない別に分析したところ、大学教育の機会をより豊かにするための次の3つの要件が明らかとなった。

1. 学ぶ目的や学習意欲を持つこと

右のグラフは、大学教育を通した学びの機会が多い・少ない別に、大学入学理由の差をみたものである。差が大きかったのは、「興味のある学問分野があること」が18.0ポイント差、「将来就きたい職業につながること」が14.7ポイント差、「資格や免許が取得できること」が12.5ポイント差となっており、大学教育を通した学びの機会が多かった人は、少なかった人に比べ、大学で勉強する内容への興味や目的を持って入学している。一方で、偏差値や通学距離、他者の推薦に関する理由には、差が見られなかった。このことから、入学前に学ぶ目的や意欲を持つことが、大学教育を通した学びの機会をより豊かにする1つ目の要件といえるだろう。

■大学教育を通した学びの機会別 大学入学理由(23～34歳)



2. 能動的な学習態度を持つこと

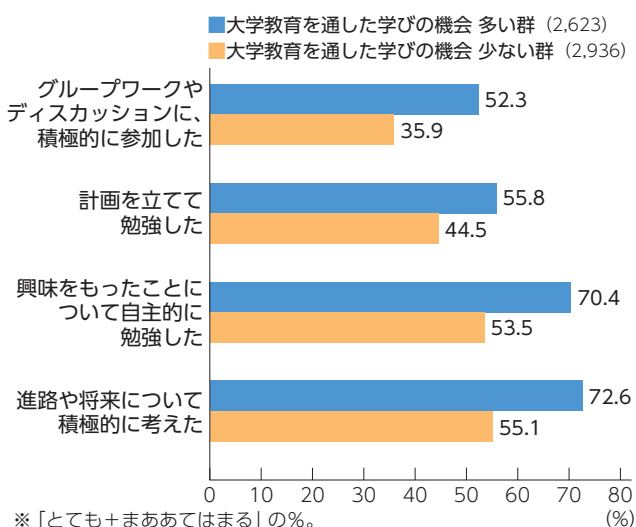
右ページ上段左のグラフは、大学教育を通した学びの機会が多い・少ない別に、高校時代の学習をみたものである。大学教育を通した学びの機会が多かった人

は、少なかった人に比べ、「グループワークやディスカッションに、積極的に参加した」、「計画を立てて勉強した」、「興味をもったことについて自主的に勉強した」、

③大学教育の機会を豊かにする学び手の要件とはなにか？

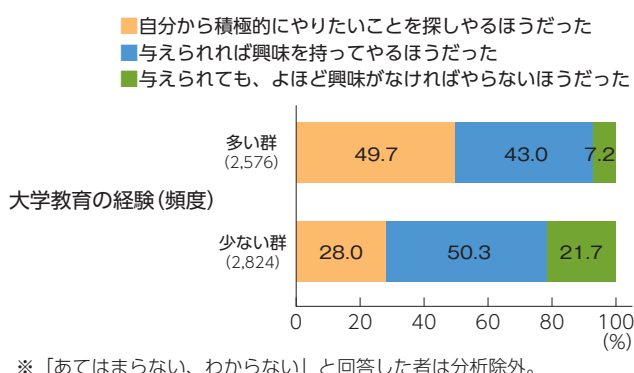
「進路や将来について積極的に考えた」に「とても+まああてはまる」と回答した割合が高い。高校の段階から自ら積極的に考え、自律的に学ぶ態度があった人ほど、大学教育の機会が豊かだったといえる。また、

■大学教育を通した学びの機会別 高校時代の学習(23～34歳)



入学時のタイプについても、大学教育経験の頻度が多かった人は、少なかった人に比べ、「自分から積極的にやりたいことを探しやるほうだった」と回答した割合が高い。このことから、入学当初より能動的な学習態度を持つことが、大学教育を通した学びの機会をより豊かにする2つ目の要件といえるだろう。

■大学教育を通した学びの機会別 入学時の行動タイプ(23～34歳)

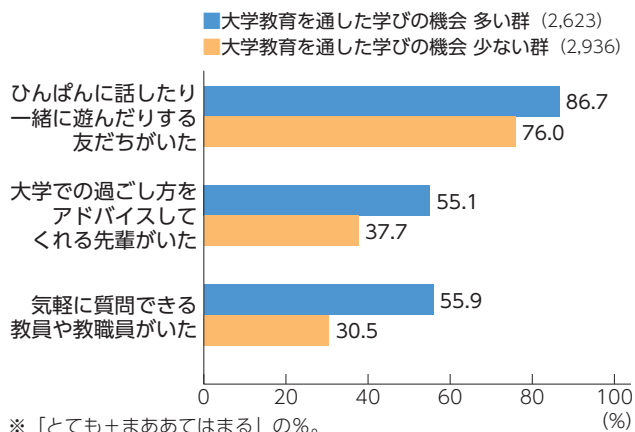


3. 人的ネットワークを持つこと

右のグラフは、大学教育を通した学びの機会が多い・少ない別に、入学時の交友関係をみたものである。大学教育を通した学びの機会が多かった人は、少なかった人に比べ、「ひんぱんに話したり一緒に遊んだりする友だちがいた」、「大学での過ごし方をアドバイスしてくれる先輩がいた」、「気軽に質問できる教員や教職員がいた」に「とても+まああてはまる」と回答した割合が高い。親しい友だち、アドバイスしてくれる先輩、親身な教職員の存在が、入学当初の学生の環境適応に効果的であろうことは想像に難くないが、今回の調査結果からは、さらにその後卒業までの大学教育を通した学びの機会にも影響することが明らかとなった。このことから、大学

入学当初より積極的に人的ネットワークを持つことが、大学教育を通した学びの機会をより豊かにする3つ目の要件といえるだろう。

■大学教育を通した学びの機会別 大学入学時から夏休み頃までの交友関係(23～34歳)



以上、大学教育の経験を豊かにする学び手の要件として、「1. 学ぶ目的や学習意欲を持つこと」、「2. 能動的な学習態度を持つこと」、「3. 人的ネットワークを持つこと」の3点が明らかとなった。これらは、大学で学ぶ上での自覚といえるかもしれない。大学が提供する教育が多種多様になる中で、学生が学びの機会を積極的に捉える姿勢はますます重要になる

だろう。学生個人の努力はもちろんのこと、高校、あるいは大学が上述した3要件の獲得につながる機会を仕掛けていくことも有用である。

本調査結果が、「豊かな大学教育の機会を通して必要な力を身につけ、卒業後の人生を自己効力感を持って生きる人」の育成に貢献することを期待したい。(ベネッセ教育総合研究所 松本留奈)

「大学での学びと成長に関するふりかえり調査」

調査企画・分析メンバー

池田 輝政	(追手門学院大学 教授)
杉谷 祐美子	(青山学院大学 教授)
飯吉 弘子	(大阪市立大学 教授)
望月 由起	(昭和女子大学 准教授)
山田 剛史	(京都大学 准教授)
木村 治生	(ベネッセ教育総合研究所 高等教育研究室 室長)
樋口 健	(ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)
佐藤 昭宏	(ベネッセ教育総合研究所 研究員)
松本 留奈	(ベネッセ教育総合研究所 研究員)
満都拉	(ベネッセ教育総合研究所 特任研究員)

※所属・肩書きは、発刊時のものです。

ベネッセ教育総合研究所のWEBサイトのご案内

本調査の詳細な分析は、今後もベネッセ教育総合研究所
高等教育研究室 WEB サイトに掲載の予定です。

<http://berd.benesse.jp/koutou/>

ベネッセ 高等

検索

で検索してください。

● お問い合わせ先 ●

本調査に関するお問い合わせは、下記までお願いします。
(株)ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所
「大学での学びと成長に関するふりかえり調査」係

TEL:042-311-3390 (10:00 ~ 12:00、13:00 ~ 17:00 / 土日・祝日を除く)

「大学での学びと成長に関するふりかえり調査」速報版

発行日：2015年9月9日 発行人：谷山 和成 編集人：木村 治生

発行所：(株)ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所

編集協力：(株)ジー・アンド・ピー

50HE08

©Benesse Educational Research and Development Institute

無断転載を禁じます。